
Travel For You

灰色狼娘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T r a v e l F o r Y o u

【Nコード】

N 0 3 1 4 D

【作者名】

灰色狼娘

【あらすじ】

リンは普通の女子大生だった・・・動物園で変な狼に会うまでは、だが。異世界の国アルフィンで魔術師のサライに拾われ、リンの新しい人生が始まる。しかし、それはイケメンと陰謀い囲まれたかなり刺激的なものだった・・・逆ハーレムな異世界召還ファンタジーです。

1-1「これは運命？」（前書き）

どうも、灰色狼娘です。

TravelForYouは初投稿作品です。

読んでくださった方がこんな世界に行ってこんなキャラと会ってみたい！と思える小説を目指して頑張りますので、よろしくお願いします。

文章力皆無の修行中の身です。

批評・応援などメッセージお待ちしております。

1 - 1 「これは運命？」

白馬の王子様なんて、信じてるわけじゃない。

でも、もし運命の人、私だけの王子様がいたら？

この出会いの意味は如何に。

第1章1話〜これは運命？〜

急ぎ足で駅へと急ぐ。

耳元で流れる曲調と足が刻むリズムが、自然と重なり口元がほころんでしまう。

3分後に出る電車を逃せば、完全に遅刻。

時間に厳しいキャプテンは2日連続の遅刻を認めるほど甘くないはずだ。

たかがサークル、されどサークルとでもいうか。

私は所属するフutsalサークルの練習へと向かっていた。

仕方がない。

奏でるリズムを掻き消して走り出す。

今日はお気に入りの黒いパンプス。

コツツコツツという小気味よい音を鳴らして速度をあげていく。

駅はもう目の前だ。

スイカを手元に出して、バンツと勢いよく叩きつける。

電車はあと30秒もすれば構内に入ってくる計算。

我ながら素晴らしい時間間隔！

・・・なんて余裕で悦に入っていると、ぴーっと耳障りな音がす

る。

「え？」

呆けた顔で改札機を見れば

「残額が足りません。」

「うそーーーーー?!」

更に追い討ちをかけるように、小さな絶叫を掻き消すような駅のアナウンス。

どうやら電車が着いたらしい。

もう諦めてしまおう。

・・・。

2日連続の遅刻、といったが、詳細を話せば今月で6度目の遅刻。嗚呼、無念。

今頃、仮病の欠席連絡なんてしてもこっちの状況はバレバレだろう。しばらく音信不通になって入院してたとも言ってみるかな。

しばし改札前で一人作戦会議。

名案も浮かばず小さく伸びをすると、駅の窓から青空が見えた。

「・・・動物園にでも行くかあ」

晴れた日には動物園！

子どもか！！と言われればそこまでけど
こんな気持ちよく晴れた日にすごすご帰宅なんて、もったいないじ
ゃん？

気持ちも新たにスイカをチャージして、私は隣街の動物園へと向か
った。

まあ、そこで何が待ってたかなんて
知るわけもなかったんだよね

原田りん、19歳。

この後、彼女に起こる珍事は、他に例を見ないほどのものだった。

平日の動物園はがらんとしていてちよつと寂しいくらいだった。
周りを見ればきつと同じく暇をもてあます大学生であろうカップル
ばかり。

先月別れた彼のことを思い出して、私は小さくため息を吐いた。
別に未練なんてないんだけどね。

こう目の前でいちゃいちゃいちゃいちゃ・・・
されると、やっぱり心が痛む。

お前ら、お互いばっか見てないでもっと動物見ろよ！
なーんて心の中で絶叫する。

そうやってカップルを避けるように道を辿っていくと、いつの間に
か狼のエリアへと着いていた。

2メートルほどの堀をへだてたところに狼達がくつろいでいる。

「お前達、気楽そうでいいねえ」

目の前にいるひとときわ大きく黒い狼などは、だらりと肢体を投げ出し大あくびをしている。

ほんつとに羨ましいわ。

人がいないと気が抜けてしまうものなのか？

思いがけず、狼相手にお喋りを始めてしまう。

今取っている講義がどうだとか、サークルでこんなことがあっただとか、本当にとりとめのない話を並べたてる。

例の黒い狼もまんざらじゃない様子でこっちを見てくるので、どうも口が止まらない。

小さい頃もこうやって飼っていた犬相手に話してたなあなんて懐かしい思い出が頭をよぎった。

「・・・ところで、お前、なんて名前なの？」

「・・・カムイ、だ。」

「・・・？」

え？

誰かに聞かれたと焦って振り向くが、そこには誰もいない。しばらくきよろきよろしてみるが、気配すらないのだ。

「何してる。こっちだ。」

低く太く、朗々としたテノール。

へえ。

最近の動物園ってこんな機能まで・・・

時代の移り変わりってすごいね

スピーカーはどこについてるのかな？なんてきよろきよろしていると

「お前は馬鹿か・・・

こっちだと言っているだろう」

声の方向に顔を向けると、先ほどの黒い狼が立ち上がりさも可笑しそうな顔をしている。

「うそでしょーーーーー？！」

最近、疲れてるって自覚はあったけど、幻聴まで聞こえるなんて・・・！

そう思った瞬間、足元がふらついて視界が歪んだ

「おいっ！どうした？！」

耳に優しいその声が焦ったように響くのを聞いたのが、この世界での最後の記憶となった。

1 - 2 「異世界で迷子」

第1章2話「異世界で迷子」

目が覚めて最初に目に入っ たものは白い天井。

白っていつても、無機質な真っ白とは違う。

温かみのある自然な白、クリーム色っていうのかな？

カーテンから漏れでる陽の光と戸外から聞こえてくる鳥の声。
ごくごく平凡でいてあまりない平和な朝のひと時を堪能する。
布団の中に潜り込み、思いっきり背伸びしてみる。

ああ！幸せ！

・・・って、ここどこ？

幸せ過ぎて、5分くらい気づかなかったけどさ

ここ、うちじゃないよねえ

こんな家に住んでる友達もいないはずだ

やっと半分くらい覚醒した頭をフル回転させる

が、何も思い出せない

動物園で変な狼が喋り出して、とそこまでの記憶しかない

あーでもないこーでもないうーんあーえー

パニックに陥りそうになりながら頭を抱え込んでいると

「目が覚めたようですね」

ドアが開く音と共に、穏やかな声が降ってきた

腰まで届きそうな銀髪に深く蒼い色を宿した双眸。

穏やかな声からの印象を裏切ることなく、彼の表情は優しげな笑みを絶やさない。

知らない人物を目の前にパニくる私を宥めた彼は、なぜか楽しそうに言葉をつむぐ。

「とりあえず朝ご飯にしましょう。」

話はその時にゆっくりできますから。」

決して命令口調ではないのに、逆らえないなにかを彼は持っていた。色々と聞きたいことはあったが、とりあえず頷く。

その様子に満足したのか、にこりと笑んだ彼はこちらに手を伸ばす。

「さあ。こちらに。」

なにもわからないまま、私は食卓へと招かれたのだった。

話をまとめてみることにしよう。

先ほどの彼は、自らをサライと名乗った。

ここはアルフィン王国の北端、夕紅の森という場所らしい。

彼はここで一人、魔術研究をしているんだと。

何が専門だとか聞きなれない単語で楽しげに語られたが、そこは割愛する。（ごめんね、サライ。笑

私は彼の家から15分程の距離にあるシャン湖のほとりに倒れていた。

彼に助けられてから2日間の間、ぐっすりと眠っていたらしい。

魔物の多く棲むこの森で無傷だったことに、彼はいたく驚いていた。

自分でまとめておいてなんだけど・・・

自分でも今の状況をまだ信じることが出来ないのが現状

どうやら私は異世界とやらに来てしまったようなのです

サライによると、異世界からの訪問者はこの世界では珍しくないんだとか。

召還された人、迷い込んだ人、自らやってくる人、などなど色々いるらしいけど。

私はどうやら迷い込んでしまったみたい。

ここに来る直前に、私がいたところの近くで誰かが異世界への扉を開いた

私はそれに巻き込まれてここに来てしまった

今のところわかるのは、それだけみたい。

魔術の世界ではそこそ有名なというサライですら、特定の世界の特定の時間に扉を開くことはできないんだって

そういう能力は王族か特殊な部族にしか使えないらしい

つまり、帰れないってこと

なんとなくわかってたんだけどね

異世界召還モノっていうの？そういう小説って

帰れないってセオリーだもんねえ

ヒロインは帰る手段を探して奮闘！そのうちに愛が芽生える！みたいな

でも実際こんな状況になるとそんなの不可能じゃん・・・って思っちゃうよ

家族や友人と会えない、それはものすごく辛い

けど、テストや就活とかさ、わずらわしかったものも無いんだよね、こっち

適応力の高さだけは昔からピカイチだったわけだけど、この状況で発揮されるとはね

まあそんなこんなで、サライとの2時間にわたるながーい朝食を終えた頃には

私はこの世界で生きていく決意ができていた

「ええ。まあ私はこれでも200歳くらいなので」

こちらの世界に来てちょうど一週間目。

相変わらず穏やかな笑みを浮かべて、彼はとんでもないことを言っ

た。

いや、とりあえず、年上だろうなあとは思ってたよ？

外見からして25歳くらいになって目星はつけてた

けど、あのかく200歳って・・・アナタ妖怪デスカ？

発端は、私が「この世界で生きてくよ」ってなんとも健気な発言をしたことだった。

そんな私にサライは、「じゃあリンを僕の養女にしよう」なんて嬉しそうに言った。

この世界にも戸籍というものがあるらしく、職を得るのにもこの戸籍がないとどうにもならないらしい。

異世界から来た人間は基本的に政府の監視の下に置かれ、保護を受けられる反面、自由には生活できない。

最悪の場合、危険だと見なされれば監禁されてしまうらしい。

だから、サライの養女として登録し、始めからここにいたという設定しようと彼は言う。

ぽかーんとした表情の私に心配そうに声をかけてくるサライ。

「大丈夫ですって！こう見えても政府の方にツテはありますし、不自然なところだって誤魔化せますよ」

見当はずれなサライの言葉に思わずふきだす。

「いや。サライが200歳ってことに驚いたの！

私の世界じゃ100歳も生きたら長生きだし、おじいちゃんの姿なんだもん」

それを聞いてサライは得心したかのように、うんうんと頷く。

「こちらの世界では、人は皆、月の加護を受けていますからねえ

異世界から来た人もここでは等しく月に愛され、長寿を全うします
外見や能力は、その人が人生において一番美しく強い時期のもので固定されるんですよ

その代わり、生殖能力は低く、子を成すことは難しいのですが・
」

へえ。

いわゆる不老不死ってやつかあ。

なんだかすごい世界に来ちゃったなあと今更ながらに思う。

科学よりも魔術が発達した世界。

銃器ではなく剣や弓が支配する世界。

そう。ここは私のいた世界とはすべてが異なっている。

相変わらず呆けた顔の私がよっぽどおかしかったのだろうか
サライは口元を手で隠しクツクツと笑っている

「リンは本当に可愛いですね」

なっ?!

可愛いという単語に顔が赤くなってしまう

酸欠の魚さながら口をぱくぱく

そんな私を見たサライは体を折って笑い出した
もうたまらないといった様子である

・・・なんかむかつく

必死に赤らむ顔を正して

「何がそんなにおかしいの!」と咎めてみるものの

「そんなに可愛いと、養女ではなくお嫁さんとして登録したくなり
ますね・・・」

だめ、ですか?」

なんてニヤニヤしてくる

「だあああああああつっ」

必死に直した顔もまたすっかり紅葉状態。

穏やかで真面目で優しくて・・・

そんなサライの印象に小さなヒビが入っていく

意外とこの男、プレイボーイなのか？！

200才を越えるという男に失礼な発言ではあるが・・・

気障なセリフなんて吐かない日本人男性に慣れ親しんできたリンには刺激が強すぎるというものだ

「まあ。お嫁さんの件は保留にしておいてあげましょう。」

いつの間にやら真顔に戻ったサライはにっこりと笑う

「ここアルフィンの民は20歳の誕生日から1年間、王宮で仕事をするという決まりがあるのです。」

リンは今19歳と半年とのことなので、今から半年後ですね。

大事な娘を奉公に出すのは心配ですが、これもこの世界で生きるためには必須ですからね・・・

これから奉公までの間、魔術・剣術・歴史など、必要なことを教えます」

あはは・・・

まあやっぱりとは思ってたけど、こっちでも就活というものはあるんだね

王宮仕えというのは、いわゆる公務員のようなものらしく、アルフィンでは最も榮譽ある仕事なんだとか

1年間の宮仕えとは、その器がある人材を探すための試用期間のよ

うなものらしい

「・・・宮仕えで変な虫がつかないように手を打たねば・・・。」

珍しく陰鬱な顔をしてサライがなにか呟く。

「ん？どうしたの？」

「いえいえ。独り言ですよ」

なにを呟いていたのかと尋ねた時には、いつものサライスマイルに戻っていた。

不思議そうなりんの表情もまた可愛らしいな、なんてサライの頭の中をリンは知る由も無い・・・。

この二人、どうなることやら？

1 - 3 「予想外の展開」

第1章3話〈予想外の展開〉

カムイは猛烈にイライラしていた。

今が稽古だということも忘れ、斬りかかって来る部下を猛然と張り倒す。

「うがああっ！……！！」

なんでなんだっつ！……！！……！！……！！」

稽古場に響く雄叫び。

しかし部下達は皆地面に突っ伏し、それに答える者はいない。

哀れ、典型的な八つ当たりというやつである。

「……いい加減にしないか、カムイ？」

いかにも呆れた、といった口調で呟く声がひとつ。

扉の方を振り向けば、金髪碧眼の美貌の男子が一名。

……と、後ろにはビクビクと震える少年が隠れるように立っている。

生き残った部下が彼に泣き付いたのだろうということとは予想に難くない。

「クレイか。すまん。」

素っ気無く返すものの、苛立ちを声から隠すことはできない。

「まだあの子は見つかってないみたいだなあ」

鬼の第一騎士団長ともあろう奴が女一人で情けないことだ」

さもおかしそーうに言うクレイに、カムイは眉をひそめる。

「仕方ねーだろ。」

連れて来たつもりが、こっちに着いたらいねーし・・・
さすがの俺にも予想外の展開なんだ」

そう呟くカムイは、傍から見たら捨てられた子犬のように不安げな顔だ。

「気配を感じるから、こっちの世界にいることは確実なんだけどな・・・

誰かの結界内にいるのか、それ以上、場所が特定できねえんだよ
変な奴にとっ捕まってなけりゃいいんだが・・・」

はうーっと彼らしくない弱気な声をあげてカムイは座り込む。
こんなカムイをクレイはいつもほっとけずにいる。

「一応、彼女を探すよう公布は出しているんだがな
名前もわからないというと、なかなか難しいものだ
お前の言葉をもとに作った似顔絵も大して役に立たんしな」

この国では珍しい黒い瞳が唯一の手がかり、といったところだろうか。

身長は160センチくらいと小柄で華奢な体型。

アーモンド型の大きな猫目にそれを縁取る長い睫毛が印象的。
厚めの唇は紅を差さずとも赤く、白い肌に咲いた華のよう。

鼻は低めだが、それが整った顔を愛嬌のあるものになっている。
くるくると変わる表情はたまらなく魅力的。

カムイの話す彼女は、こんな感じだ。

しかし、惚れた男の言葉なんて信じるもんじゃない。

まあ実際はもつと平凡な娘なのだろうと、クレイは結論付けている。

しかし、興味が無いわけではない。

女遊び激しく、一人に執着したことなかった友人がここまで入れ込む女。

しかも一目惚れと来た。

こんな面白い話が他にあるだろうか？

「まあそんなに焦るなよカムイ。

同じ世界にいるんだから、必ず巡り合うさ。」

にやりと意地悪そうな笑みを浮かべて、友人を励ます。

単純な友人は、ぱあっと顔を綻ばせ「そうだな！俺は頑張る！」なんて言っている。

さあて、これからどんな面白い筋書きが待っているのやら？

異世界の娘さんとやら。

俺を楽しませてくれよ？

1 - 4 「教師と生徒の複雑な事情」

第1章4話「教師と生徒の複雑な事情」

時がたつのは早いものだ。

リンがアルフィンに来てから、すでにふた月がたっていた。

「むー。さらいせんせー。きゅーけーはー？」

机に突っ伏したリンに、サライはにこりと告げる。

「早く着替えて下さいね。次は剣術の時間ですよ。
庭でお待ちしていますからね。」

日本の大学生って楽だったんだなーと今更に思う。

好きな時間に講義を組んで、出席がない講義には行かない。

もともと自由人なリンは、興味のある講義以外にはほとんど出席していなかった。

それが今や、専属家庭教師付きの生活である。

しかも笑顔を絶やさなくせに、ものすごく厳しかったりする。

そのおかげか、リンの魔術・剣術・その他教養はぐんと成長していた。

小さい頃に習っていた剣道、よく読んでいたファンタジー小説、そんなもの達がここにきて役に立つなんて因果なものである。

まあもともと暗記が苦手なリン。歴史や細々とした礼儀作法の授業などはいまだに進歩無し、なわけだが。

サライの指導の下、リンは乾いた土壌のように、様々な技術・知識を吸収していった。

サライとしては複雑なところである。

教師としてはリンは最高の生徒だった。

興味のあることに対しては、彼女は貪欲ともいえるくらいに追及した。

1を教えて10を学ぶ生徒といったところか。

暗記が苦手であることと、焦って小さなミスを犯しがちなところがあったが、それを引いても優秀といえる人材だった。

しかし、優秀な彼女のこと、宮仕えに出したらそのまま帰ってこないのではないか？

そんな不安も頭をよぎる。

向上心のある彼女のことだ。

士官の仕事を辞退することは、きっと無いだろう。

それに女の士官となれば、数も少ない。

華に群がる蝶（いや、虫だな）のように、男達が寄ってくるだろう。やはり何か手を考えねば・・・

「サライ？準備できたよ」

庭で思案にふけていたサライにリンが声をかける。

気づかないうちに顔が固まっていたようだ。

眉間にしわを寄せ、口をへの字にしたリンが、にししつと笑う。

「こーんな顔になってたよ？」

ああ。なんでこの子はこんなにも私を温かい気持ちにさせるのだろうか。

リンといると不思議なくらいに、心が穏やかで暖かなものになる。と同時に、誰にも渡したくない、と自分らしからぬ熱い感情も沸き

起こってしまっ。

「さて、剣術の稽古と参りましょうか」

さっきの顔についてはノーコメント?!と騒ぐリンをわざと無視して笑っ。

やはり自分はこの子をまだ手放せないな、と心で苦笑した。

稽古と講義に明け暮れる二人の毎日だったが、夜のお茶会だけは日々の恒例行事となっていた。

お茶会、というよりピクニックとでも言うべきか?

リンが倒れていたシャン湖のほとりで月を見ながらお茶を飲む。

アルフィンの人にとって、月光に当たることは、月の加護を受けるという意味でも大事なものである。

サライがリンを見つけたのも、日課の月光浴の途中だったのだそうだ。

リンが来てから、夜の月光浴はお茶会へと姿を変え、二人の会話の場となった。

宮仕えに向けて組まれた過密スケジュールをこなしていると、感じる暇さえない郷愁。

元の世界と変わらずに輝く月を見ると、封印したはずの感情たちが溢れ出てくる。

そろそろ大学の友達はテスト勉強かな?とか

お父さん、またゴルフでムリしてぎっくり腰になってたりしないかな?とか

温かいカップを両手で包み小さく呟くリンをサライは穏やかに見守る。

慰めるわけでも頑張れと鼓舞するわけでもないサライにリンは救われていた。

ただただその深く蒼い双眸で見つめられていると、大丈夫だよと言われているような気がした。

サライは夜の海のように、とリンは思う。

去年、サークルの夏合宿で行った千葉。

夜の海に行って、黒い波を眺めていたことを思い出す。

生き物のようにうごめく漆黒の水面。

人のいない海岸では、自分の吐息と波音以外に音は存在しない。

ぽつんと砂浜に座り込めば、だんだんと海に自分自身が融けていくかのようにだった。

この黒く広大な海ならば、全てを、ちっぽけで卑しい自分すらも受け止めてくれる、そんな気がしたっけ。

この世界に来て、初めて会った人がサライではなかったら？

そう考えると、いつも寒気が走る。

もともと適応力が高いとはいえ、リンは家を失い、家族や友人を失ったのだ。

一時的なものではなく、永遠に。

今までの人生を一瞬で白紙にしたようなこの不可抗力な旅はまだ始まったばかりなのである。

どうして私だったの？

なんのために連れて来たの？

旅立つ直前に出会った黒い狼。

リンをここに連れて来たのは彼だと、リンもサライも考えていた。彼に会ったら聞きたいことばかりだ。そして、ちよっぴりの恨み言も。

なにはともあれ。

リンは生きている。

今までにないほどに、生の実感に溢れ、今という時を謳歌している。まあ、恨み言ついでお礼も言っておあげようかな。

なんて月を見ながら、リンは微笑む。

だから、早く私を見つけてね？

黒い狼さん。

1 - 5 「準備万端?!」

月は万物を慈しみ大いなる愛情を注ぐ。

しかし、自分にとってこの愛情こそ、忌むべきものだった。

世界を呪い、自分自身を呪い、月を呪った。

そう、彼女に会うまでは。

人に言わせれば、それは一瞬の逢瀬。泡沫の夢。

自分にとっては、それは世界の全てを変えた永久の記憶。

お願いだから。

愛しい君よ、早くこの腕の中へ。

第1章5話　準備万端?!

剣術、魔法、史学、教養、文字、馬術……

日々の目も眩みそうな怒涛の講義も最終段階を迎えていた。

自分の研究なんてどこ吹く風といわんばかりに手取り足とりで教えてくれるサライ大先生。

「自分の研究は大丈夫なのー?」

と、心配半分・講義減への期待半分で聞くリンに大先生はさらっと微笑む。

「私は仕事より家庭を優先する男ですよ」
リンちゃんったら赤面。

「う、うん。だって私、サライの養女、だもんね」

あははと乾いた笑いをおまけにつけとく。

サライはというと、やはり楽しそうに笑っている。

リンが来てからというものの、サライの笑いはバリエーションが大幅に増えた。

サライスマイル改とでもいったところか？

穏やかな笑みがもともと好評だったサライだが、彼の様々な種類の笑みを網羅しているのはリンだけであろう。

しかし、そんな二人の日常もあと一週間で、一端の区切りを迎えることになる。

宮仕え、もうそんな時期になってしまったのだ。

講義の総まとめに加え、荷造りの準備や書類の申請が慌しく行われた。

そういえば、今日は新しい衣装が届くんだっけ？

元の世界とは全然違うメルヘンチックな衣装達が我が家に届くわけだ。

選びたい！と言った時には、サライがもう注文し終えた後だったので、ちよつと残念だったわけけど・・・。

まあこうやってプレゼントを待つ子どものようにドキドキするのも悪くないかなって思う。

「さあ。お待ちかねの荷物が届きましたよ」

わお！

どんぴしゃのタイミング！

衣装缶ごと頼んだのだろうか。

精巧な彫刻が施された美しい木箱が目の前に置かれる。

開けていい？！っとはやる気持ちを抑え、サライに問いかける。

子どもを慈しむかのような目でリンを見ていたサライは促すように頷く。

やっぱ、ドレスみたいな入ってるのかなあ？

いやいや、宮仕えってお仕事だしメイドっぽいのか？

フリルとかレースとかいっぱいいついてるのかな？

わくわく・・・

ん？

いちまいい、にまいい、さんまいい、といった具合で引っ張り出していく。

が、想像していたものとはかけ離れたものばかりが出てくる。

そう大くない衣装缶にこれでもかという程入っている衣類だが、お目当てのものは最後まで出てこなかった。

「・・・サ、サライ？」

「ふふ・・・お気に召しましたか？」

えーっと。

教養のお勉強で習ったマナーとかでは、ドレスを想定したものもあった、よね？

んでもって、教科書の女の子たちは、みんなメルヘンなドレスを着ていた、よね？

サライ君？

強烈な視線攻撃で答えを促す。

「実は・・・リンのことは養女ではなく養子ってことにしちゃい

ました」

テヘっ という効果音さえついてきそうなサライの表情。

「養子ってことは息子ってことよね・・・って、はぁーーーーー
ーーーーーっ?! 意っ味っ不っ明っ!」

森から鳥がはば立つ音が聞こえてきそうだ。

んーと。頭を整理してみよう。

まず始まりは異世界にトリップ。

んで今度は、性別詐称?

どっただけですか? (汗

ぽかーんと口を開けたままのリンにサライは意気揚々と説明する。

「大丈夫です!

私の魔法で体の作りは一時的に変えられますし、ばれることは
まずないです

アルフィンの都も最近は治安が悪いですしねえ・・・

男の方が宮仕えに出しても安全かと思い、独断と偏見により、息
子に決定させていただきました

ダメ、でしたか?」

最後の一言のみ、ちょっと悲しげな顔を作ってみたり。

本音を言えば、悪い虫を追っ払うのではなく、そもその芳しい花
を隠す方が効率的と判断したまでのことである。

だが、ここは心配顔をしてリンの同意を得ねば・・・!

そんなサライの心中も知らず、まんまと心配顔にひっかかるリン。
ああ！哀れ！

「あつ・・・」

そんな心配してくれてたのに、「ごめんねっ」

サライの優しい配慮を踏みにじってしまった・・・
そんな反省でいっぱいリン。

「これっ着たらけっこう可愛いかも！
ちよっと試着してくるね！」

健気だ・・・健気過ぎる。

騙してごめんね、と心の中で謝りつつも悪気無し反省する気無しの
サライを置いて、リンはどたばたと自室に戻る。

数分後

（可愛いッ可愛すぎるッ）

男装の麗人というよりは、女顔の美少年・・・

男物の服に袖を通し、帽子に髪を入れ込んだリンは、正直、めっちゃ
くちゃ可愛かった。

（ああ・・・ここにリンの言うシャシンとやらがあれば、どんなに
いいことか！）

男装がちよっと恥ずかしいのか、もじもじ気味のリンの様子が可愛
さに拍車をかけている。

この場で襲ってしまいたい！なんて、不埒な誘惑を懸命に抑え、「
似合ってますよ」と微笑む。

「あ、ありがと」と照れたりされると、余計、こっちは辛いのだが。

これはまずいと「んー。顔とかもちよっと魔法でいじりますか？」

と問うサライを必死にリンが止め、なんとかお披露目は終わった。

2・1「いざ都へ！」（前書き）

早くもサライから巢立ちです。

テンポのいい文章を目指していたのですが、逆に味気なくなってしまうので怖いですね（´、`）

これから登場人物もどんどん増えていきますので、彼らのこと、よろしく願います。笑

2 - 1 「いざ都へ！」

第2章1話「いざ都へ！」

サライからもらった四次元ポケットならぬ四次元バッグを片手に、もう1時間はゆうにリンは立っていた。

「ご飯は3食ちゃんと食べて下さいね？」

「召還状と地図、ちゃんと持ってますか？」

「手紙を書いたら、このバッグに入れてくださいね？」

・・・以下略。

上京した時の親のことを、思い出す。

そんなのわかってるよ！と言いたくなることばかり言うのだ。しかし、うんざりというより、可愛いなと思ってしまう。

こんな時の魔法の言葉。

「大丈夫だよ、サライ。困ったり何かあったりしたら、すぐサライに連絡するから。」

とびきりのスマイルをつけて、そう囁く。

泣き出しそうなサライは、はっとした顔になり、すぐに苦笑を浮かべた。

「これじゃあ本当の親みたいですねえ

リン、頑張ってくるんですよ」

これまた上京した時と同様、サライはリンを優しく抱擁した。

「うん」

暖かな腕に包まれ思い切り息を吸い込む。

嗅ぎなれた大好きな芳香　サライの優しい匂い。

この安心感をイメージさせる匂いとも、一年間お別れか、としんみり思う。

「一年間なんてすぐだよ。

だから、待っててね、お父さん？」

悪戯めいた笑みを浮かべ、そつと腕から離れる。

人生で二度目の巣立ち。

ありがとう、さよならは、今は言わない。

だって最後までいになっちゃうじゃない？

だから、また会う日まで、ありがとうはとっておくんだ。

その代わりに

「じゃあ、いつてきます！」

そう元気に告げて、リンは都行き of 馬車へと乗り込んだのだった。

いつてらっしゃい、と寂しげでいてどこか誇らしげな笑みを添えたサライの眩きはきつとリンに届いただろう。

「だーーーーーあッ！広すぎるっつーの！」

リン・・・いやいやリンクは都についていなや最速で迷子になったそう。この町のだ真ん中で雄たけびをあげている少年はリンクと名づけられたリンであった。

地図は確かにもらっていて手に握り締められているのだが。まず、この地図！アバウトすぎ！

そして、町！店と小路多すぎ！

アホか！と、地図を地面に叩きつけるものの、すぐに反省して、くしゃくしゃの地図を取り上げる。

もう、町に入って2時間だが、城とおぼしき聳え立つ塔の連なりにはいっこうに近づけない。

真ん中に見えてるんだから楽勝！と思ったのが、運の尽きだったようだ。

今では地図のどの辺に自分がいるのかすらわからない。

時間に余裕を持っては来たが、このままでは時間に遅れてしまう。

しよっぱなから遅刻なんて、元の世界よりひどい・・・。

さっきまでの勢いはどこへやら。しょんぼりと道端に座り込んでしまふ。

20才の誕生日にして、迷子。

その事実だけでも泣けてきた。

「君、気分でも悪いの？」

正直、天の声かと思った。

春の木漏れ日のような優しいげで上品な声。

この際、悪魔の囁きだろうとなんだだろうと構わなかったが。

「迷子なんです！」

思いつきり叫びながら立ち上がる。

声の主は、これまたサライバリのイケメンだった。

金髪碧眼ってやつ？

ああ。なんてこの世界はイケメンパラダイスなんだろう。

「ふーん。

女かと思ったら、男かよ。めんどくせえ」

豹変、という単語はきつとこういう時に使っただろうな、と。

真っ白になりかける頭の中でぼんやりと考えた。

めんどくせえめんどくせえ……頭の中でエコーする。

「ほら。どこまで行きたいのかはつきりしやがれ。

俺は城に戻るとだから、途中までなら連れてってやる」

はつとその顔を見ると、そこにあったのは意外と優しい笑みだった。

「だりい」とでかでかと貼り付けたかのような表情は健在だったが、きよとんとしていると、なぜか後頭部をはたかれる。

「ぼーっとしてんじゃねえよ！

お前みたいな女が男がわかんねーような奴がうるついているとなにかとトラブルるからな

こっちとしてはほつとくよりめんどくせーんだよ、ぼーかほら、行くぞ、ちんちくりんが」

照れ隠し、なのだろうか？

まるで言い訳のように、早口でまくし立てる彼はなんとも可愛らし

くリンクの目に映った。

「ありがとうございます」

にやにやしながらついていくと「笑ってんじゃねえ気持ち悪い」と予想通りの罵声が飛んだのであった。

「そういうことは先に言え、すつとこどつこい」

呆れ顔で、クレイと名乗った金髪碧眼男が悪態を衝く。

場所は王城正門前。

どうして王城なんか用があるんだ？と聞いてきたクレイに宮仕えなんですとのほほん答えたリンク。

何が気に食わなかったのだろうか、「まったく、わかってりや・・・」

「くそつ」とぼそぼそ呟くクレイを見つめる。

彼のおかげで時間には間に合いそうだが、ちよつとめんどくさいのも正直なところだった。

ありがとうと言ってここで別れるはずだったのに。

遅刻、変な人との遭遇、もう宮仕え初日にして最悪過ぎる出だしである。

「リンク!!フェロン!!リアータ。」

おま・・・いや、君にお願いがあるのだが。」

サブいぼが立った。

聞きなれない新しい自分のフルネームに、打って変って慇懃無礼か

つ優しい口調に変わったクレイ。
顔はというと、笑顔かつ脅しといったかたゝい表情である。

「はっ、はい。なんででしょうか」

恐々といった感じで尋ねると、クレイが耳元に口を近づけた。

「てめえ、今日の俺との会話、誰にも言うんじゃねえぞ
俺は王城において、麗しのクレイ様と呼ばれてる貴公子なんだ
それに傷つけやがったら・・・どうなるかわかってんな？」

ヤクザも真っ青というべきか。

ただただ何度も頷くしかできないリンクの様子にクレイは満足気だ。

「ちなみに私僕は貴方の直属ではないものの上司にあたりますので
今後ともよろしくね、リンク君？」

うふふと花でも背負ってそうなクレイに連行されて、リンクの宮仕
えは幕を開けた。

クレイに連れてこられたのは、集合場所に指定されていた王城の一
室だった。

奴はいえ、リンクを椅子に座らせるとさっさとどこかへ消えた。
もう一度念押しすることは忘れなかったわけだが。

（・・・クレイに会って、やっぱりよかったわあ）

変な奴と関わってしまったことを心から悔いていたリンクだが、部
屋に通され安堵すると同時に考えを改めた。

王城の内部は都以上に入り組み、たとえ王城まで着いたとしても中

に入って迷っていただろう。

大学入学当時、広すぎるキャンパスで何度も迷子になっていたことを思い出すと、これからの宮仕えが憂鬱でならなかった。

「おお。やっと来たか」

えらく明るい声が背後からかかる。

しかし、返事をしようと、振り向いたの瞬間だった。
声の主を確かめる間もなく、世界がゆがんだ。

それは極彩色の世界。

視界は回転し、様々な色達が鮮やかに舞った。
万華鏡みたい。

そう思ったのを最後に、世界は暗転。
リンクは意識を手放した。

2 - 2 「イケメンは変態？」

第二章第二話「イケメンは変態？」

頬に冷たい感触が気持ちいい。

小さい頃は風邪を引くと、お母さんが冷やしたタオルで触れてくれて・・・

ちょうどこんな感じだったなあ。

仕事で忙しい母親を拘束してしまうこと、申し訳ないと同時になんだか嬉しかったつけ。

そんなことをぼんやりと考えながら、重い瞼を持ち上げる。

目を開けると、そこには見慣れないイケメンが二人。

キラキラの金髪にサラサラの黒髪。

並んだ二つの顔は、揃って心配顔。

非日常적でおかしな光景に思わずふっと笑ってしまう。

「おい！笑う元気があるんなら起きろ！」

お。金髪の方が喋った。

なんかこのツンケンした口調、聞き覚えがある。

だけど、そんなこと知っちゃこつたない。

私は寝起きがよろしくないのだ。

うっさいなーと呟いて再び布団に潜り込む。

すると、「だーっ！なんだこの生意気坊主！」という金髪の声が再び。

どうやらこのまま寝かしておいてはもらえないようである。
意を決し、勢いをつけて上半身を起こす。

半覚醒のまま安眠妨害者達を見渡すと、なかなか面白いことになっている。

真っ赤になって怒っている金髪に体を二つ折りにしてお腹を抱えて笑う黒髪。

なんだこれ？

「ほんつとにすいませんでしたッ」

寝起きとはいえ・・・しょっぱなからやってしまった。

ぼんやりしていて気づかなかったが、怒っていた金髪はクレイだった。

そして、リンク起床後しばらく爆笑していた黒髪は、リンクの直属の上司にあたる人物だったのだ。

突然倒れたリンクをここまで運び、介抱してくれていたのも彼だったようだ。

あのタオルの感触、気持ちよかったなあと頭の片隅で思う。

二重人格イケメンのクレイと違って、なんだかい人っぽいしな。なにはともあれ、一安心である。

ようやく笑いの波が去ったのか、謝り続けるリンクに黒髪が話しかける。

「えっと。リンク＝フェロン＝リアータだな？

さっきクレイが言ったとおり、俺は君の直属の上司ってやつだ。カムイって呼んでくれ。第一騎士団へようこそ。」

人懐っこそうな笑顔。

生来の顔はかなり鋭いもので、無表情ならきつとかなりの強面だろう。

戦いの最中のものだろうか、眉の辺りに一本、消えない刀傷まである。

それなのに、へらへらしているとも取られかねない彼の様子。

リンクは訝しい気持ちでいっぱいだ。

加えて、灰色の瞳は澄んでいて美しいが、時として寂しげな色を灯しているように見えた。

この人は、なにか踏み込んではないなにかを、ぽっかりと空いた穴のようなものを抱え込んでいる。

警告にも似た心の中の違和感。

しかしそれは同時に、どうしようもなく彼に魅かれてしまう甘美な誘惑でもあった。

なぜだろう。

彼は人間なのに、どことなくあの黒い狼に似ている。

名前のせいだろうか？

カムイと名乗った黒い狼と同じ名を持つ黒髪の青年。

頬に突然触れた感触にはっとする。

「おーい。人の顔見て考えごとかー？」

カムイの顔を見ながら、考え込んでしまっていたようだ。

確かに自分が悪い。だが、この男、いつまでぶにぶにし続けるつもりだろうか？

いつの間にやらリンクの目の前まで来たカムイは、両手でリンクの頬をぶにぶにしている。

「あ、あのお・・・ふにふにするの止めてくれませんか？」

不覚にもどきまぎしてしまふ心臓を心中で叱咤しつつ、おどおどと止めに入る。

「かぁいいなぁ～お前。ほっぺたふにふにのふにふにだーっ」
突然の絶叫に動けずにいるリンクをがばっと抱きしめるカムイ。

「相変わらずの可愛いものの好きの変態め。ぬいぐるみフリークがッ・・・」

クレイが窓際でぼそつと呟く。

・・・。

前言撤回。いい人だけどなんか変。

ああ。神様。この世界のイケメンは、頭のねじの様子がおかしいみたいです。

2 - 3 「新しい仲間達」

第二章第三話「新しい仲間達」

朝五時に起床し、朝稽古をこなして、朝礼に出席

朝・昼・夜と5人編成のチームごとに割り振られたシフトに従い、それぞれ見回りへ

空き時間は稽古なり飲むなり暴れるなり自由

第一騎士団の生活は、まあこんなものである。

騎士団とは名ばかりのもので、戦時以外は町のお巡りさんのようなもの。

空気はかなり自由で、集まった人員もかなり仲がいい。

これは団長の人柄が強いようで、第10騎士団までそれぞれ空気に差があるようだった。

「はーあ。けっこう暇だね。」

宮仕えに備えて散々鍛えられたリンクの感想はかなり間の抜けたものだった。

今も見回りの途中で、同じチームの仲間と酒場でたむろしているところだ。

「まあそんなこと言うもんじゃねえって。

騎士団が暇なのは、平和な証拠だぜ？」

にししと笑ってまた大ジョッキを空けたのは、ゼクス。

鮮やかな赤髪が目を引くタレ目のイケメンだ。

酒好き・女好き・博打好きの三拍子を揃えた天晴れな男だが、実力

は相当のものらしい。

宮仕えを経て第一騎士団にそのまま就職した切れ者だったりする。

「とりあえずゼクスさんは飲みすぎです！」

「・・・間違いない。」

そんな抗議の声をあげるのは、シュラフとカイ。

シュラフはどこぞの貴族のおぼっちゃま。

金髪に童顔の可愛い容姿は第一騎士団の天使とまで言われるほどだ。

が実は、中身は相当タフガイ・・・いや小悪魔かつ破壊魔だったり・・・。

彼を怒らせると一師団が吹っ飛ぶというのは、第一騎士団内のみで囁かれる伝説である。

その横に常時寄り添うようにいるのがカイ。

えらくガタイのいい傭兵のような佇まいをしている彼は、その無口さゆえか、かなりの誤解を受けている。

本当は料理が趣味という可愛い男のだが、彼と歩くと道が開くか絡まれるか、そんな展開ばかり。

「いいじゃねえか。」

俺は飲める相手が久々に見つかって最高に嬉しいんだ。水差すなつて」

ぽんぽんと肩を叩いてくるゼクスにため息をこぼすリンク。
そもそも自分はもともこのチーム配属ではなかったのだ。

思い返せば宮仕え初日。目を覚ましたリンクは第一騎士団の本部へと連れて行かれた。

新人さんが来るらしいということで、既に本部には団員達が待ち構えており、けっこうな歓迎っぷりであった。

その中でリンクが軽い自己紹介を終えると、誰やらが「飲むぞー」

「歓迎会だー」と叫び出し・・・

結局、本部内での大酒宴と雪崩れ込んだ。

原料は違えども、ビール・ウイスキー・スピリタス・ワイン・・・拳句には泡盛や日本酒のようなものまで

出てくるわ、出てくるわ

女の子のような容姿をしているリンクに、団員達は甘めかつ弱めのカクテルめいたものを差し出してくる。

が、残念ながら、リンクはそんなもんではなかった。

所属していたフットサルサークルでは「潰し屋」と恐れられ、飲めばテンションガチ上がりの酒豪・・・

そんなリンクがカクテルもどきなんぞで酔うわけがない。

アルコールも微量ながら摂取し、テンションにもエンジンがかかってきたところで

「リンク、いつきまーーーーーす」

と、近くにあったビールもどきの樽を抱えてイッキ。

現代風に言えば、ピッチャーのようなものか？

アルコールが喉を駆けぬけていく一気特有の感覚を味わい、樽を床に置いて顔を上げると・・・

そこにあつたのは啞然・呆然・尊敬・・・様々な表情の男達と沈黙だった。

「お前、さいこーーっ」

若干、しーんとなってしまうた場を変えたのはゼクスの一声。

「ゼクス様、いつきまーーす」

と、リンクの時とセリフは同じものだが野太い声をあげて、先ほどのものより大きな樽を抱える。

ゼクスの無茶飲みは毎度のことなのか、周りは特に不安げな様子も見せず、また盛り上がり始める。

一気飲みを終えたゼクスと拍手喝采の男達を尻目に、リンクは自分で酒を作り出していた。

（これはテキーラっぽい匂いだなあ）

（ウイスキーの等級がわかんないから、とりあえず全部飲むかな）
そんなことを考えつつ、飲み飲み飲み・・・

新しい世界の酒をほとんど飲み試した頃に辺りを見渡すと、まさに死屍累々といった感じ。

あちゃーっと苦笑いをし、とりあえず苦しそうな人の介抱にあたる。大学の飲み会を思い出しながら、背中をさすっていると後ろから声がかかった。

「お前、可愛い顔のぼっちゃんかと思ったら、すげーんだな！
見直したぜ！」

と、先ほどの赤髪青年ゼクスが立っていた。

「まあ、クレイから見た目に騙されるなどは言われてたが。」

「ここまで面白いお転婆だとはなっ」

言葉を引き継いだのは、カムイ。

よくよく見れば、生き残っているのは、この二人と奥に座っている金髪の可愛い少年とガラが悪そうなお兄さんだけのようだ。

「お酒好きってだけじゃないですかあ」

てへへと誤魔化し笑いをして、テキーラもどきをカツと煽る。ゼクスやカムイのような酒豪は大歓迎である。

「ま、とりあえず飲み直そうぜ兄弟！」
と、まだまだ元気そうなゼクス。

「おいおい。うちの酒倉庫を飲みつくすんじゃないぞ？」
言葉とは裏腹にカムイもやる気満々のようだ。

「お酒はダメなんですけど・・・一緒にお話しに入れてもらってもいいですか？」

酒豪三人がショットグラスを持ち寄って輪を作っていると、鈴のような可愛い声がかかる。

振り向けば奥にいた金髪の少年がにこやかに立っている。

「お。天使の皮を被った悪魔め。」

お前の自称オレンジジュースがスカイランだってことくらいお見通しだぞ？」

ニヤニヤと返したのはゼクス。

スカイランとはオレンジリキュールをベースにしたかなり強いカクテルのようなものだ。

普通は小さなコップで飲むものだが、どう見ても少年の手にある杯はそんなレベルじゃない。

少年はくすりと余裕の笑みでもって答える。

「あんたは黙ってなよ、ゼクス。」

僕はあんたじゃなくって、このリンク君と話したくて来たんだ。ねえ？はじめましてリンク君。僕はシュラフっていうんだ。」

突然に話を振られ、思わずキョドってしまう。

「あ。はじめまして！よろしくね、シュラフ君？」

クレイ並みの豹変ぶりにどきまぎしつつ答えれば、返ってきたのは満開の笑顔。

「思った通り〜〜！仲良くしてねえ！！」

可愛らしく両手を胸の前で組んできゃぴきゃぴと喜ぶシュラフ。

その横からぬうつと手を差し出してきたのは、ガタイのいいお兄さん。

「・・・カイ、だ。よろしく。」

言葉少なだが、うつすら浮かべた笑顔は、彼の人柄を表すような温かいもので、好感を覚えた。

「こちらこそ。僕はリンク。」

と、手を握り返すと、なぜだか他の生き残り達も寄ってきた。

「カイったらずるいぞお。僕も握手握手〜」

「俺とだつて握手しろよな！」

「団長の俺を置いてそりやないだろ〜」

なぜか5人で握手。

変な状況だけど、なんでかな？

めちやくちや嬉しい。

知らない世界に放り出されて、初めてできた「友達」。

サライのような保護者とはなにか違う、新しい関係。

そう思うと涙が出てきた。

突然泣き出してしまったリンクに4人は大慌て。

どうしたんだ？！とか大丈夫？！と口々に言う4人に、リンクは泣

きながら笑ってしまった。

「・・・ありがとう」

泣いたり笑ったり忙しい体を必死に制御して、それだけ呟く。
そんなリンクをカムイがそつと立たせてドアへと導く。

「明日に備えて今日は寝るぞ」

そう3人に言い残してドアを閉めるカムイ。
涙が止まらないリンクをゆっくりとした歩調で団員の寮へと連れて行く。

肩に置かれた手が暖かくて、余計に涙が止まらない。

ふっとカムイが止まったところで顔をあげると、昼間に荷物を置いた部屋の前だった。

「・・・あのっ」

カムイは、謝ろうとしたリンクをそつと抱き寄せて制止する。

自分の腕のなかにすっぽり入ってしまう少年。

今日会ったばかりのただの部下、しかも男に、自分はいったい何を
しているのだろうか？

「何も言わなくていい。

今日はゆっくり休め。」

そう声をかけると、ますます俯いてしまう腕の中の少年に、カムイ
は語りかける。

「泣くのは悪いことじゃないぞ。

特に、嬉しい時は、な？

素直に感情を表せるのは、お前のいいところだ。大事にしろ。」

壊れ物のように頭をそつと撫でてやると、やっと少年は顔を上げた。
涙の跡が月明かりに反射して美しかった。

「ありがとうございます」

にこりと笑う少年。

やはりこの子には笑顔が似合う。

「さあ。部屋に入ったらさっさと着替えて寝ろよ？

明日は早いんだ」

このまま抱きしめていたら、そのまま離したくなくなりそうだ。
そんな自分の奇怪な感情に苦笑しながら、彼を部屋へと促す。

「おやすみなさい」

それだけ呟いてリンクが部屋に入るのを見送った。

ドアが閉まるのを確認し「お前に月の加護があらんことを」と呟く。
可愛い顔の男の部下つても問題だなと自嘲の笑みを浮かべながら、
本部へと戻った。

その次の日。

「リンクはゼクスのチームに入ってもらおうと思う。」

団長からの突然のお達し。

昨日の時点では、ライスという穏やかそうな青年のチーム配属だったはずだが？

「ゼクスのチームはもともと4人な上に、そのうちの1人がほとんど顔を見せないんだ。

ゼクスのほかは昨日残っていたシュラフとカイだから、馴染みやすいだろ？」

突然の配置換えに驚いたものの、初めての友達がチームメイトになるのは嬉しいことだ。

リンクは配置換えに同意し、新しいチームメイトの元へと向かった。

そして今・・・

昼の見回りから酒を飲んでいるリーダー、ゼクス。

外ではいつだって礼儀正しく可愛らしい天使、シュラフ。

無口で強面だが心優しい力持ち、カイ。

第一騎士団に来て一週間目のこの日、酒場で。

リンクは新しい仲間を改めて見渡し、温かい気持ちになったのだった。

2 - 4 「それぞれの想い」

第二章第三話「それぞれの想い」

リンクが第一騎士団に来て一週間目、か。

仕事を終えて、自室には戻らずに行き付けの酒場へと今日は来ている。

「遅くなつてすまん。」

声の主はわかっている。クレイだ。

カムイがこの酒場で会うのは彼だけ。

当のクレイはこじやれたバーが好きらしく、場末の居酒屋といった感じのこの店を嫌っているようだが。

カムイ本人はこの飾らない感じが落ち着いて、いつの間にやら常連客となっていた。

「んで、例の女はまだ見つからないわけ？」

単刀直入な奴である。

答えをわかっているくせに、あえて言わせて落ち込ませないで欲しいものだ。

「・・・残念がらな」

「そのわりにあんま悲しそうじゃないんだな？」

さすがは幼馴染の親友といったところか。

職場も違つくせによく見ているもんだ、と思う。

「あのリンクって餓鬼のせいかな？」

ニヤニヤ顔で凶星を突かれると、ため息しか出ない。

「初めてリンクに会った時、彼女が見つかったって思ったんだけどなあ」

そしたら突然、倒れた。

彼女との初対面と一緒にだった。

長い長い一生から言えば、まさに一瞬の逢瀬が頭に蘇る。

段々と薄れていく記憶の中のおぼろげな彼女の顔と目の前の少年の顔はそっくりだった。

「ま。でもリンクは正真正銘の男だしなあ。残念デシタ。」

クレイは意地悪そうな笑みを浮かべているが、目は本当に心配そうである。

「俺もリンクを拾った時は、例の彼女かと思って思ったんだぜ？」

でもなあ、色々調べてみたんだが、あいつの身元は確かなんだよな。

養子ってところは気になるが、魔術一族の最高階級フェロンの名を冠する上に、あのサライさまさまの養子ときた。」

そう、カムイだって色々調べてはみたのだ。

フェロンというのはアルフィン国において、魔術分野を司る一族にとって最高の栄誉といわれる冠名。

カムイが持つリオリスタというのは剣術分野におけるフェロン階級、クレイもリオリスタに次ぐリオルンという冠名を持つ。

更に言えば、リンクの養父サライ「フェロン」リアータは、魔術界

の権威と呼ばれる男である。

先代の王時代に起こった大戦を機に隠居し今は研究生活と聞いているが、その名が持つ力はいまだ絶大なものである。

「リンクが彼女なのかはまだわからん。

でも、彼自身になにか惹かれてしまうのも事実なんだ。」

「・・・おい。お前、そんな趣味あったっけ？」

正直な気持ちを吐露すれば、予想通りの反応。

これまた今日何度目かのため息。

自分でもよくわからなかった。

しかし、あの少年になぜか惹かれてしまう。

ここ一週間、自分には男を愛する趣味なんぞないと自分に言い聞かせ、わざとリンクを避けた。

だが結果はどうだろう？

いつの間にやら彼を探している自分がいた。

「アルフィン1の色男の座を奪い合った相手がお前だなんて信じた
くないくらいの様子だぞ

かなり重症だな」

呆れたか？そうかそうか。

自分でもわかっていて。確かに重症だ。

リンクが倒れて寝ている時、もう目を覚まさないんじゃないかと気が
が気じゃなかった。

リンクが泣いている時、腕の中に閉じ込めてしまいたくて仕方が無
かった。

そして今、「彼女」とリンクを重ねているのか、リンク自身に惹か

れているのかわからず、気が狂いそうだ。

大好きな酒もなかなか進まない。

どうしちまったんだよ、俺。

探し出して愛すべきは「彼女」であって、リンクじゃないってのにな。

カムイの自嘲的な笑みを、クレイの心配を隠すような戯言を、夜は小さく包み込みゆつくりと更けていくのだった。

一方、同時刻のアルフィン北端夕紅の森では・・・

「リンのばかぁ・・・」

御年200歳、魔術界の権威サライ大先生はキャラ崩壊を起こしていた。

リンクがリンクになり、宮仕えに出てから一週間。

健気なリンクは毎日のようにサライに手紙を書いていた。

それは嬉しい。最高に嬉しいのだが。

「なんでこんな楽しそうなのかな、リンちゃん・・・」

最初の3日間くらいは寂しそうな文章で早く帰りたいと綴っていた。それから徐々に手紙の登場人物が増え、寂しいという文字が減ってきた。

そして今日。

『サライへ

こつちに来て一週間が経ちました。

今日は他のチームの人たちも交えて夕ご飯を食べたよ。

なんとカイの手作り！すごく美味しかった！

サライにもいつかカイの作ったご飯、食べさせたいな〜

第一騎士団は男の人ばかりで最初はむさくるしかったけどだいぶ慣れたよ

シユラフなんて女の子みたいだしね！

でも、みんな私のことも女の子みたいって言うんだよ

魔法だからバレないけど、今日なんか体触られて確認までされたんだから！

参っちゃうよね！

じゃあ明日も早いから今日は寝るね。おやすみ。

リンより』

突っ込みどころが多すぎるよ、リン！

カイの手料理じゃなくて私が食べたいのはリンの手料理です！
ってゆうかリンです！（ライ

男の人ばかりってめちゃくちゃ心配です！

体触られたって参っちゃうってレベルじゃないでしょ！

ああ・・・

親の心子知らずというか、女の子には男心ってわからないものなん
ですね・・・

しくしく・・・リンの世界でタイイクズワリと呼ばれる姿勢をとっ
ていじけてみる。

宮仕えは一年間。

しよっぱなの一週間でもうこのざまである。

これからどうやって生きていけばいいのやら。

200年も生きてきたのに、なかなか名案が浮かばない。

いじいじしていると、窓からコツコツと音がする。

窓を見れば、赤の羽色が美しい大きな鳥が窓を突いている。

「こんな時間に誰でしょうねえ」

きつと誰かの使い魔だろう。

窓を開けてやると、手紙らしき巻物を置いて一礼する。

巻物の封印を解くと、光の塔と呼ばれる魔術研究の中心機関からの書簡だった。

なにやら3カ月後に王立魔術学院の入学式があるから出席してくれ、という内容だ。

いつもなら考える暇もなくお断りする話だが、今回はふっと考える。これは王都に出るいい口実になりそうだ。

リンクに会いに行くついでに入学式に出席すればいい。

既に主目的が摩り替わっているが、そんなこと気にしないサライ大先生。

ありがたく出席させていただきますと書きこみ、封印をし直して、鳥に渡す。

「さあ。これではらくは楽しみができましたね。」

一人うふふと笑うサライを残して、鳥は夜の空へと再び滑空していった。

2・4「それぞれの想い」（後書き）

サライが予想以上にキャラ崩壊を起こしてしまいました。笑
これからちよつとずつリンの知らないところで様々なことが起こり
始める予定です。これからよろしくです

2・5「騎士団のオットメ」

第二章4話「騎士団のオットメ」

ここ最近、アルフィンの都では不穏な噂がまことしやかに囁かれていた。

「四天子が復活する」

それは均衡の終結。

100年前に終わった大戦の再来を意味するであろう悲劇の序章。

アルフィンの北に位置するギアルという大国。

100年前の大戦は、この国から始まった・・・

というより、この世界で起こった歴代の戦争はほとんどこのギアルから始まっている。

四天子・・・またの名を死天子、破滅の使い。

3000年前に遡るギアル建国から脈々と受け継がれる破壊の遺伝子達。

山脈に囲まれ一年のほとんどが冬というギアルの情報はほとんど外部に漏れない。

そのため四天子についても詳しいことはまだわからず、ただただ恐ろしい存在として他国に伝わるのみである。

彼らの復活とは、それぞれ4血脈の頭目達が十分な力量に達し、再び四天子が集ったことを意味する。

噂はただの噂だと流してしまえば、たしかにそれだけのことだ。

しかし、火の無いところに煙は立たないというもの。

再び起こりうる大戦への不安は、アルフィンの都に少しずつ翳りを与えていた。

リンクが朝目覚めると、いつも以上に外が騒がしかった。寝坊したかな？ちよつと焦りつつ、身だしなみを整えてドアを開ける。

すると、中庭に小さな人ばかりができていた。

『以下のチームに所属する者は一週間後の騎士団合宿に参加すること。』

チームフライ

チームゼクス

チームラシユオン

尚、この合宿への参加は強制である。

詳細については本日正午に団長室にて説明をするので各員出席すること。

フォード』

団長カムイ＝リオリスタ＝ブラッド

なぜだろう。

この張り紙前に集まった野郎共は、リンクを見ると同情するかのような目を向けてくる。

慰めるように肩をぽんぽん叩く者までいる始末。

状況を飲み込めずゼクス達を探すが、ネボスケ達はまだ夢の中にいるようだ。

「リンク。ちょっとこっちにこい。」

ん？と人垣越しに振り向けば、カムイ団長。

おはようございますと挨拶をすると、伸びてきた腕にくしゃくしゃと頭を撫でられた。

毎度ながら、この小動物扱いには困ったものである。

「お前、まだ状況が把握できてないみたいだなあ。

ちよつと説明会前に話しておくか」

人の波に潰されそうになっていると、急に腕を掴まれて救出される。その勢いのままカムイの胸の中にすっぽり収まってしまった。

「……………つあ」

条件反射なのだろうか、ぎゅっと抱き締められてしまう。

カムイ本人も自分の行動が予想外だったらしく、硬直気味だ。

（ええええ???）

力強い両腕と厚い胸板で抱擁されて、不本意ながらもドキドキ……。

魔法で外見を男のリンクにしたって、中身は女の子のリンなのだ。抱きしめられて顔が見えないことを幸いに思いっきり赤面する。

「……………あ、あのう……………」

しばしの沈黙を経て思いきってカムイに声をかけると、びくつと反応があると同時に拘束する力が急に弱まった。

「すつすまない!!!」

一応はお偉い団長のくせに土下座しそうな勢いである。

お前がちょうどいいサイズで・・・とか、昨日はあんまり寝てなくて頭が・・・とか消え入りそうな声で言い訳をまくしたてている。

(・・・なんか可愛い)

大男が真っ赤になって謝るなんてそう見えるもんじゃない。
思わずふふつと笑ってしまう。

「・・・お前。人が必死に謝ってんのに・・・」

不本意そうに背ける顔はまだほんのり赤い。
なにはともあれ・・・この団長のことをリンクは嫌いになれそうにもなかった。

「と、まあそんな感じだから頑張ってくれ。

リンクは新人なのに申し訳ないが、ゼクス達がいれば大丈夫だと思う。

なにかあつたらすぐ俺に言って欲しい。」

「・・・はあ。」

人だかりから離れベンチに腰を下ろし、騎士団合宿なるものについての説明を受けた。

騎士団合宿とは現在10に分けられた騎士団合同で行う年に一回の合宿で、恒例行事となっているらしい。

まあ、ここまでの大枠を聞けば、いたって普通の行事が、補足事項を聞いてようやく先ほどの団員達の様子に納得がいった。

第一騎士団から第十騎士団までを統括する王国騎士団。

その団長、つまりは総団長ともいうべき人物が超がつくドS・・・。

そんな人物が主催する合宿もまた当たり前のようにドS・・・！正直、毎年のように負傷者、逃亡者が発生する合宿なんて聞いたことがない。

「リンクーーーーっ」

自分の不運を呪って空を見上げていると、ゼクスと思われる声の主が空を滑空する。

人間って空を飛ぶもんだっけ？

ぼんやりしている間にもゼクスの影はどんどん大きくなり、ぐしゃつとカムイの上に着地した。

「さつさとどけっゼクス！」

「・・・っいつてー」

巻き添えを食らったカムイの上でゼクスが腰をさすっている。

この男、静かに入場することができないのだろうか。

「団長おーさつきはリンクのこと抱きしめてたって聞いたぜー
なーんで俺には開口一番にどけ！なんだよー？」

突然のゼクスの反撃は見事な会心の一撃となったようだ。
にやにやするゼクスとは対照的にカムイは真っ赤になっている。

「ほーお。なんも言えんっつーことは、凶星か団長？」

うちの可愛いチーム員に手え出すんなら、先にリーダーに言ってくれんと、なあ？」

カムイに跨ったままで高笑いをするゼクス。

イケメン同士とは言え、残念ながらゲテモノ級の画である。

「ゼクス。いい加減にしてよね。」

「・・・そうだ」

呆れたような声がふたつ。予想に違わずシュラフとカイの登場である。

「おお。やっと来たか。遅いぞお前ら。」

「ゼクスが急に走り出して飛ぶからでしょ。馬鹿なんだから。」

「・・・間違いない。」

ほっとけばいつもの不毛なやり取りに発展しそうである。

「ねえ、ゼクス。僕に用があつたんじゃないの？」

とりあえずやんわりと止めにはいつてみる。

「おお。そうだそうだ！掲示見ただろ！合宿だよ！」

そつえばさつきゼクスは去年も参加したってカムイが言ってたっけ。

各団から団長チームを含めた4チームずつが参加するのだが、選出されるチームは合宿に耐え切れれると思われるチーム、つまり有望株

を揃えるんだとか。

ゼクスのことだおおかた「めんどい」だの「だるい」だの言いに来たんだらうと次の言葉を待つ。

「めっちゃくちゃ楽しみだなッ！！！！みんなで旅行だ！」

・・・。

その場の空気が固まった。

馬鹿もここまできると天晴れなものだ。

「頼もしいな、ゼクス。だが、いい加減俺の上からどかないか？」

「おう。団長。まだそこにいたのか。」

ゼクス以外全員のため息が重なる。

・・・リンクの合宿への不安が一気に加速したことは言うまでもないことだった。

2・5「騎士団のオットメ」（後書き）

久々の更新です。

プライベートの方が忙しくなってきたのでちょっと更新が遅れるかもしれませんが、ちまちま頑張っていきます。

これからちよつとずつリンちゃんの周りで事件勃発していきますので、応援よろしくです。

2・6「二泊三日のマゾ合宿1」

第二章 6話「二泊三日のマゾ合宿1」

あるゝひ もりのーなかあ くまさぁんにゝ 出会ったゝ

規則的な馬の蹄の音とゼクス閣下の素っ頓狂な歌声が森に響く。

森の空気が心地よく、思わず鼻歌を歌っていたらゼクスにその歌を教えるとせまがれたのだが・・・

今更だが、ゼクスに歌という凶器を与えたことに気づくリンク。

これから始まるであろう恐怖の二泊三日を目前に早くも戦前逃亡したいくらいだ。

後方から続く他のチーム達も同じ心境らしく、ゼクスに恨みがましい目を向けている。

「あと2・3キロで着きますので、みなさん覚悟を決めてくださいね」

げっそりとした団員達に苦笑しつつも明るく告げるのは副団長のライスさん。

カムイは合宿に先駆けての団長会議があるとかで昨日のうちに団を発っていた。

あと2・3キロという宣言通り、合宿場となる古城めいた建物はぐんぐんと近づいている。

静かな森の中に佇む美しい古城。

これが合宿でなく旅行だったなら、どんなに嬉しいことが。

突如、ゼクスの歌声が途切れる。

「奴さん、早速のお出迎えときやがったぜ？」

いかにも楽しげな口笛までおまけにつけて、ゼクスがにんまりとする。

はて、お出迎えとは？と視線を前方に移せば、武装した騎士達の一団。

その様子はとてもお出迎えなんて言えるものではなく、明らかに臨戦態勢といったところか。

「さあ、始めましたよ。」

着く前にやられたなんてことになったら第一騎士団の恥ですからね。

準備体操がてらに暴れてきてください。」

相変わらず朗らかだが言っていることはかなり物騒なライスさん。

ここにいる全員が真剣を帯びているものの、出発前に一度集められ、稽古の時と同様に刃が切れなくなる魔法をかけられている。

好き放題暴れても命の危険はないということか。

もともと暴れる騒ぐは第一騎士団の得意分野。

先陣を切って突っ込んでいったゼクスに、皆意気揚々と従った。

「あ。言い忘れてましたが、向こうは王国騎士団の方々ですからねえ。」

ライスさんの相変わらず明るいが遅すぎる一言が聞こえた者はいたとかいないとか・・・

満身創痍、とはこういう時に使う単語なのだろうとリンクはぼんやり考えた。

最初だからまだ大丈夫だろうと勝手に見積もったのがそもその間違いだっただろうだ。

お出迎えに来てくださった方々はなんと、泣く子も黙る王国騎士団幹部様ご一行だったのである。

こっちの戦力は17人、対する相手は5人。

楽に勝てると思ったのも束の間、ばっさばっさとなぎ倒されて、こちらのほとんどが落馬の上に気を失うはめになった。

リンクはと言えば持ち前のすばしっこさで逃げの一手。

ゼクスは落馬してもめげずに根性と底無しの体力で絡み続けた。

シュラフとカイはコンビネーションを発揮してうまく応戦していたようだ。

残りのチーム達は気を失うか戦意喪失して場を見守っていた。

ライスさんと他団長チーム員2名はこれも予想の範囲内だったらしく、今は怪我人の手当てにまわっている。

「第一騎士団のみんな、お疲れ様です。騎士団合宿へようこそ。」

先ほど戦った騎士のうち一人が残り、なにやら挨拶を始めた。

他の4人は後方から来ている騎士団のお出迎えに向かったようである。

「私は王国騎士団のフランチです。今から皆さんを合宿の舞台となるラインシュタット城へご案内します。」

第一騎士団はなかなか出迎え甲斐があり、楽しかったですよ。」

爽やかな笑みを浮かべるフランチ氏だが、壮絶なお出迎えの後となるとなんだか胡散臭い。

「さあ、姫がお待ちですので。」

ん？姫がいるの？

合宿初参加のメンバー達は一様に目をぱちくりさせる。

一方のライスさんやゼクスをはじめとする合宿経験者達はげんなりした顔つきだ。

不思議に思ったリンクは姫？とゼクスに問うが

「ま、楽しみにしとけ。べっぴんさんだからな。・・・」

ゼクスの呟きに初参加陣がわぁっと盛り上がる。
その後に続いた「・・・中身は保証しないがな」というばやきは綺麗に掻き消され、リンクの耳にも届かなかった。

ラインシュタット城に着くとまず合宿の間滞在することとなる部屋へと通された。

5人一室の相部屋。

以前、古城を改築したホテルの写真を海外旅行パンフレットで見たことがあったが、まさにそのものといった感じだった。

窓から見える景色も一等級。

「見て見て！中庭の湖！白鳥が泳いでるよ！」

「白鳥って食えんの？」

「ゼクス。あんた何でも食おうとすんのやめなよね！」

「・・・多分、食えない・・・」

窓から外を眺めたりふかふかのベッドで飛び跳ねたり、気分はもう

修学旅行だ。

出発前のゼクスの言葉に呆れていたことも忘れ、リンクはすっかりはしゃいでいる。

夜は酒盛りだ枕投げだと4人ではしゃいでいると、ふと扉にノックする音がする。

「どうぞ。」

シュラフの返事と共にゆっくりと開く扉。
そこには黒髪の青年が立っていた。

「え？だんちょ・・・？」

呆けたように呟くリンクに、カムイそっくりの青年は嫌悪感たっぷりの声音で答える。

「あんな奴と間違えないでくれないか。

私はスライだ。新入りが入ったなんて聞いてないぞ。」

後半はゼクス達に向けられた言葉だったようだ。

ゼクスにしては珍しく気難しい顔をしてる。

「よお、スライ。久しぶりじゃないか。

この子はリンク。引きこもってるお前と違って、新入りなのによく頑張ってくれてんぜ」

「よく言う。飲んでばかりで仕事もろくにしていないようなお前達に頑張ることなんてあるのか？」

シュラフは相変わらず家出中か？お父上はさぞかし恥じておられるだろうな。

カイも腰巾着のまま。弱小貴族のご子息は苦勞するな。同情する

よ。」

ふつと鼻で笑うスライと名乗る青年は完全に上から目線だ。いつも笑顔を絶やさないカムイとは顔は似ていても、全く違つとりンクは思った。

と、同時に、切れた。

「あんた！さつきからぐちぐちぐち……何様なの！！

どんだけ偉いのか知らないけど、あんたにそんな失礼なこと言う権利ないんだから！」

スライの目の前までずんずん迫つてまくしたてる。

身長160のリンクは、180くらいありそうなスライを見上げる形になるが、威勢だけは素晴らしいものだった。

「失礼な女だな……」

「なっ？！僕は女じゃないぞ！」

女だと言われ思わず焦ってしまう。

サライの魔法はほぼ完璧だが、まれに魔法抵抗力が強い人間にはもとのリンクの姿が見えてしまうというからなおさらだ。

ただ童顔だから女に見えただけならよいが、この陰険な男にばれたとしたら大変なことになるだろう。

「リンク。その辺にしとけ。」

肩に温かく大きな手を乗せられて振り向くと、いつの間にやらカムイが立っていた。

「おっ、お前っ！」

「スライもだ。大人げないぞ？」

突然のカムイの登場に挙動不審なスライを見て、カムイはいつもの笑顔を浮かべている。

だがリンクの目には、その表情は悲しそうにも皮肉な笑みにも見えなかった。

「もうすぐ集合の時間だぞ。みんな中庭に集合してくれ。」

いつの間にやら時間が経っていたようだ。

廊下には移動し始めた騎士団員達の流れができている。

合宿早々に遅刻など御免こうむる。リンク達は慌てて中庭への流れに混じった。

「・・・というわけで、さっきのスライっていう奴はカムイ団長の弟で、うちのチーム員なんだ。」

中庭に集まってお偉い様の到着を待ちながら、シュラフから説明を受ける。

いつも騎士団の活動に参加していないのは、他機関で魔術研究にも従事しているために特別に許されているらしい。

まあ、毎日来ない理由にはなっていないが、彼の家柄上、誰も文句は言えないようだ。

当のスライといえば、今も離れたところでどこぞのエリート騎士団員と談笑中。

チームごとに集まっているという命令を完璧にスルーしている。

「団長と顔はそっくりなのに、なんであんな性格悪いの？」

「まあ団長んこのブラッドフォード一族は・・・」

苦笑いを浮かべ語り出したシュラフの声をさえぎって鐘の音が鳴り響く。

中庭の中央に作られた石造りのステージに、一人の女性が上つていくのが見える。

ルビーのように真つ赤な髪は腰のあたりまで届き、ゆるやかな波のようである。

瞳を彩るのもまた赤。

それらの色彩は彼女の勝気な表情を際立たせていた。

「べっぴんさん」「姫」・・・ゼクスや王国騎士団員の言葉が脳裏に蘇る。

姫というより女王といった方がしっくりくるなとリンクは惚れ惚れと彼女を見上げた。

「皆のもの！今年も騎士団合宿への参加、感謝するぞ！」

先ほどまでざわついていた中庭が、彼女の一言で一気に静まる。

「私は王国騎士団長を務めるメアリ＝リオリスタ＝ブラッドフォードである！」

おおー！と湧き上がる場内を尻目に、しばし固まるリンク。

え？この綺麗なお姉さんが、例のDSの王国騎士団長？

しかもブラッドフォードってことは・・・！

騎士団合宿初日、早くもリンクの頭は沸騰寸前だった。

2・7「二泊三日のマゾ合宿2」（前書き）

久々の更新です。申し訳ない

自宅PCの調子もよくなったので、今後は更新きちんと進めたいと思いますので、よろしくお願いします。

2・7「二泊三日のマゾ合宿2」

第二章7話「二泊三日のマゾ合宿2」

騎士団合宿初日は、まさに「てんてこ舞い」といった様相で過ぎていった。

今は大広間での夕食中だが、周りを見ればみな一様にケガを負ったり顔色が悪かったりと満身創痍である。

そんな中、リンクは大はしゃぎ。

「これってキャビア？！あのセレブ食キャビアなの？！」

「やーばーいッ！このお肉！口の中でとろける〜！」

頬を紅潮させ興奮するその様は、非常に愛らしいものだ。
が、みな疲れ果てている中できやっきやと騒ぐ彼女はかなり異様である。

更にリンクの隣に居座るゼクスはいつもと変わらぬ様子で目に付く限りの食べ物・酒をかきこんでいるし、シュラフとカイも上品に食事を楽しみ、ワイン談義などしている。

「第一騎士団とこのゼクスチームの奴ら、化けもんだろ・・・」

周囲のため息など知りもせず、4人は合宿を心から楽しんでた。
そこへ、カツツカツツと兵士のものではない足音が近づく。

ふっと4人が顔を上げると、そこに立っていたのは騎士団長。

あまりの唐突な登場、そしてなによりも彼女自身が放つ威風堂々たるオーラに気圧され、しばし時が止まったかのような錯覚に一同は包まれた。

「へえ。今年は可愛い子が二人もいるって聞いてたけど、ほんっと可愛いわね!!」

・・・ハイ?

たつぷりと間をおいて彼女が発した言葉は、誰しもの予想を裏切るものだった。

よくよく見ればメアリ騎士団長の頬はうつすらと紅潮し、握り締めた両の手は心なしかわなわなと震えているように見える。シユラフとリンクはさながら蛇に睨まれたなんとやら。

ゆっくりというかじりじりと歩み寄ってくる騎士団長を目の前に完全に硬直していた。

周囲も「これから何が起こるんだ?」といった期待や不安が蔓延し、先ほどまでざわついていた大広間は水を打ったように静かになっていた。

「や~~~~んツ!もう食べちゃいたいくらい可愛いっ!!!!」

静寂を突き破る絶叫。

そして、ガタンッと椅子が倒れる音が続く。

・・・大広間中のみなが正気に戻ると、そこにはシユラフとリンクを抱きしめ頬ずりする騎士団長閣下の御姿があったとな・・・

「だ~~~~ら~~~~何度言ったらわかるのです姉君!!」

大広間での一件から一時間後、ここは騎士団長室である。

部屋には青筋を立てて叫ぶカミイ、困ったように笑うフランス以下騎士団長付き騎士の面々、そして・・・メアリ騎士団長となぜかそ

の膝の上にちょこんと座る顔面蒼白のリンクとシユラフ。

「カムイのわからずや！私はこの子達が欲しいの！」

そう。大広間での一件の後、メアリはリンクとシユラフを自室へと誘った。

（注・誘ったというより連行したというほうが正しいが、ここはメアリの名誉のためにも誘ったと言っておこう。）

それを慌てて追ったのがカムイや団長お抱え騎士達。

可愛い子猫ちゃん達（メアリ談）との逢瀬を邪魔され、メアリはいたく不機嫌だったが、二人がカムイの第一騎士団所属と聞くやいなや様子が一変した。

端的に言えば「子猫ちゃんを寄越さないよ」というわけである。

基本的に団長権限を使えば人事は一発決定なのだが、見習い期間であるリンクはそうもいかない。

所属団の団長であるカムイが許可・推薦という形をとらなければ、異動できない。

「ですから、姉上。二人は我が第一騎士団の主力メンバーであり、彼らを欠くことは考えられないのです。私情による勝手は慎んでください」

メアリの膝の上で、リンクは思わず赤面してしまう。

カムイが自分をそのように買ってくれていたなんて知りもしなかったのだ。

騎士団合宿に選ばれたことだけでも嬉しかったのに、こんな形で認められていると公言され、なんだか嬉しいやら照れるやら……である。

「私情がなによ！あんだだっ子猫ちゃん可愛いなはあとか言

ってんでしょ！」

「はあはあッ？！あ、姉上？！」

「あんたの可愛いもの好きくらい知ってたからね！あんたみたいな変態のそこには危なすぎて置いとけないわよ！」

「なっ！・・・自分も変態のくせに何自分棚の上にあげてんだこの馬鹿姉！」

「馬鹿姉ですって？！いい年してぬいぐるみ抱いて寝てるあんたに言われたかないわよ！」

「あんたこそ王国騎士団に自分好みのイケメン揃えやがって！」

「なによ！イケメンで強くて最高じゃない！萌えよ！萌えの極致だわ！」

「本性晒しやがったな！」

・・・以下略・・・

黙ってればいい男いい女。

そんな姉弟が顔を突き合わせてあられもない内容の喧嘩をする。

その横では目のやり場を失った同席者達が互いに哀れみのような視線を交わす。

・・・ハッキリ言っでどうしようもない。

示し合わせたように同席者一同、ため息。

そんな中、すつくと立ったのはリンク。

「いい加減につっしてくださいッ」

ぐわつと効果音が付きそうな勢いで姉弟が振り向く。

二人のあまりの目の据わりようにヒツと一歩引いたリンク。

しかし、突進してきた二人の前ではその一歩などなんの甲斐も無かった。

「怖がらせてごめんねえー」

いや、怖かったのは喧嘩じゃなくて今のあんた達だよという突っ込みも二人の耳には届かないようだ。
奪い合うようにリンクを抱きしめる。

「あの、とりあえず、リンク君とシュラフ君自身に意見を聞いてはどうでしょう？」

リンクを救ったのはフ란ツさんの提案。

「確かに、それが妥当ね。」

「おう。それなら間違いないな。」

両者共に自分が選ばれると自信満々なのか、目が爛々と輝いている。

「まず、シュラフ君はどう思いますか？」

「もちろん王国騎士団よね？子猫ちゃん！」

「仲間と別れるなんて嫌だろ？シュラフ！」

フ란ツ・メアリ・カムイの言葉が重なる。

シュラフ本人といえば、冷めた目で一同をぐるっと見渡し

「僕は・・・リンク君に任せますよ」

と、にっこりと笑った。

傍から見れば天使の笑顔だが、「さあて、面白いもんが見れそうだな。楽しませてねリンク？」と脅迫めいた意味が付されているというのはリンク以外知りようもない。

（シュラフのばかああー！）

この世界に来てから修羅場は何度か見たが、この時ほど逃げ出した

かったことはなかったとリンクは後に語ったという・・・。

「ぼ、僕はっ・・・」

ずいっとにじり寄る変態姉弟。

勘弁して欲しい。

美形の癖に変態。

この世界の定番といえば定番なわけだけど。

二人揃われると、正直、太刀打ちできる気がしない。

枯れそうになる喉を必死に絞って声を出す。

「僕はっ、カムイさんのところで働きたい、で・・・す」

後半に行くにつれて声が小さくなったのは認めるが、我ながら頑張ったと思う。

目の前の二人はというと？

両者共には呆けたような顔である。

さすが年長者とでもいうか、先に呪縛が解けたのはメアリ。

「子猫ちゃん！カムイが上司だからって気を使わなくてもいいのよ？」

リンクの頬に両手を添えて囁くメアリの顔を見て、本当に綺麗な人だなあと場違いも甚だしいことを考えてしまう。

しかし、それとこれとは別である。

ふうっと一息ついて、説明を試みる。

「メアリ騎士団長のお誘いは本当に光栄ですし、嬉しかったです。

お誘いを断ることがどんなに馬鹿なことかもわかっています。
でも、今は・・・僕達を戦力として認めてくれているカムイ団長の下でカムイ団長のために働きたいと思うんです。」

一気に話しながら顔が赤くなるのがわかる。

一介の駆け出し騎士団員が王国騎士団の誘いを蹴るなんて、どんなに馬鹿な行為かくらいわかっていた。

でも、どうしてもカムイのことが頭から離れない。

たった数ヶ月。

ゼクス達のように常に一緒にいるわけではない彼。

それなのに、いつも見守られているような気がした。

落ち込んでいるとどこかしらか現れて何時間もただ隣で話を聞いてくれた。

巡回中にゴロツキをとつちめた日には、頭を撫でてくれたっけ。

思い出せば思い出すほど、カムイの下で働きたいという思いが強くなる。

そして、さっきの言葉。

カムイが自分を必要としてくれている、それがたまらなく嬉しかった。

ぬいぐるみフリークの可愛いものの好きの変態でも構わない。

それでもいいから、彼のために働きたい。

戦場でもし誰かのために死ぬとしたら、彼のために死にたい。

自分でも制御不能なくらいに、色々な感情が溢れ出した。

「リンク・・・ありがとう」

ふと我に返るとリンクの頬には幾筋かの涙の跡が残り、体はカムイの腕の中にすっぽりと収まっていた。

ぽんぽんと背中を優しく叩かれ、ああこんなにこの人の腕の中は安心できるんだ、と微笑む。

「まったくー。これじゃあまるで私は噛ませ犬じゃない?」

しまった!とばかりカムイを押しやり、メアリ騎士団長に向き直る。どんな鬼の形相が待ち構えているだろうと戦々恐々と目を向けたわけだが、目に飛び込んできた彼女の表情は、予想外にも晴れやかな笑顔だった。

メアリはケラケラと笑ってカムイにつめよる。

「変態だとは思ってたけど、ついに美少年に目覚めちゃったわけえ???

ちよいと話を聞かせなさいよ」

いわゆる腐女子は、異世界にもいたようである。

自分の弟がまさかねえとかぶつぶつ言いながらピンクの手帳になにか書き込んでいらつしやる。

ネタ帳とかいうやつだろうか・・・。

「あ、あの・・・」

メアリの様子に不安を感じたリンクが声をかけると

「大丈夫よ、リンクちゃん!カムイと引き離したりなんかもうしないわ!

その代わり・・・たまに王国騎士団に顔出して近況報告してね?つまり、その・・・ね?ABCとか?・・・きやあww」

「へ???」

自分で言っただけで赤面する騎士団長様。
リンクはわけがわからず呆然。

シュラフは部屋の隅で腹を抱えて笑っている。

「リンク・・・おまッごふっ」

お前のこと俺は心から頼りにしてるぞと言いたかったカムイ。
残念無念。

その科白が最後まで紡がれることはなかった。
部屋の外で成り行きを見守っていたゼクスとカイが雪崩れ込んだついでに、カムイに衝突したのだ。

「リンク〜〜！やっぱ俺達と離れるなんかありえねーよな！」

一瞬前までカムイがいた場所にはゼクスが陣取り、リンクの頭をわしゃわしゃ掻き撫でる。

カイはシュラフのところに行ったようだ。

「なにになに?!カムイにはもうライバルまでいるわけ?!」

シュラフちゃんにも相手がいるの?!

ちよーーーー萌えーーーーー!!」

腐女子はゼクス・カイを見逃さず、再び湧いている。

カムイはまだゼクスの足元でびくついている。

「もう意味わかんないっつーーーーのーーーーー!!」

リンクの絶叫虚しく、合宿初日の夜は刻々と更けていくのでありました。

2・8「二泊三日のマゾ合宿3」

第二章8話（二泊三日のマゾ合宿3）

目が覚めてまず目に入っただのは鮮やかな赤。

そして、ぼやけた視界を広げていくと僕の隣にはとびきりセクシーな美女……。

「ひいぎやぁー……っつ？！」

「なっ！敵襲か？！」

「……リンク。静かに起きれないの？……」

そう。そうなんです。

僕はすっかり忘れていました。

昨晚、「リンク君とシュラフ君と一緒に寝てくれないと私、もう騎士団長やめるんだから！」と凶悪な駄々を捏ねたメアリ騎士団長。

反対するカムイ団長を半ば無視する形で、結局、メアリ騎士団長の部屋で寝たんだっけ。

まだドキドキしている胸を押さえてとりあえず深呼吸する。

「……あ。おはようございます。」

枕の下に隠していたと思われる短刀を握り締めるメアリ騎士団長とめちやくちゃ不機嫌そうなシュラフに、テヘツ と効果音がつきそうな挨拶をする。

寝起きが悪い悪魔様には当然こんな誤魔化し効くわけないが、イケメン大好き騎士団長様には効果抜群だったようだ。

朝っぱらからいや〜んと萌えていらっしやる。

さすが腐女子。寝起きもあくまで腐女子。

半ば呆れ顔でメアリ騎士団長の抱擁を受け流しつつ、とりあえず自分の貞操（？）が無事だったことにほっとするリンクだった。

シユラフの機嫌も直ったところで、三人は連れ立って大広間へ。ちょうど朝食と朝礼の時間だったようで、団員達はみな席に着いていた。

「「「おはようございますメアリ騎士団長ッ！」「」」

大広間の窓ガラスがぴりぴりするような大音量の挨拶。

どんだけ体育会系だよ！と内心で毒づくが、団員達はいたって真剣である。

メアリに腕を引かれ上座の王国騎士団席にずるずると連行される道のり、ものすごく視線が痛かった。

穴があつたら入りたいというのは、こんな特殊な状況でも使えるんだなあ・・・昔の日本人ってすごいなあ・・・と半分麻痺した頭は無意味なことを羅列する。

が、腐女子はそんなリンクの思考に気付くはずもなく、満面の笑み。シユラフも注目の的であることがまんざらでもないらしく、これまた満面の笑みである。

一晩で噂が広がったのか、みなだいたいの流れは把握しているようだ。

噂の主演三人が朝から連れ立って登場したことによって着くであろう尾ひれ背ひれ以下略については想像もしたくないといったところだが・・・。

昨日まで5人分だった王国騎士団席はやっぱり二人分の席が足され、メアリ騎士団長の両隣にリンクとシユラフは案内された。

お口アーンや過剰なスキンシップそしてカムイの強烈な視線攻撃を

除けば、朝食は滞りなく平和に終わった。

そしてそのまま場が朝礼へと進み、衝撃は走った……。

「……と、今日の訓練は以上の説明の通り。各人、鍛錬に励むように。」

そして、第一騎士団のリンク・シュラフ両名は私の護衛についてもらう。」

大輪の花の如き笑顔の騎士団長様とは対照的に大広間の騎士達は各々あらん限りの驚愕の表情を浮かべた。

（お、俺のメアリ様があ……）

（いや、メアリ様。あなたほど強ければ護衛なんていらんでしょ……）

（１００％私情というか欲望だろっそれ！）

（実はイケメン好きミーハーだって噂はマジだったのかよ！）

しばし、これでもかという程の突っ込みが各人の中で行われた。

美貌のドＳ騎士団長として憧憬・崇拜の頂点に立っていたメアリ騎士団長の意外過ぎる一面。

みな驚きは並大抵なものではなかった。

しかし、当の本人といえは大広間に広がった、否、自らが広げた波紋も気にすることなく「今日一日よろしくね子猫ちゃんたち」などとにやけ面である。

嗚呼、哀れなり騎士団長の崇拜者達。

そんなわけで、リンクは今、メアリ騎士団長の右膝の上。

眼下ではドＳ騎士団長がよなべで考えたドＳな訓練が行われている。隣には訓練をサボれてゴキゲンなシュラフがメアリ騎士団長と談笑中である。

なんてカオス・・・。

悄然とした顔でぼんやりと訓練の様子を見つめていると、なんだか様子がおかしい。

よくよく見れば、赤い物体が動く先々で混乱が起き、ばたばたと人が倒れるパターンを発見した。

さらに赤い物体に目を凝らすと・・・それはゼクス。

「ゼクスつたらまた暴れてる。ほんつと馬鹿なんだから。」

「子猫ちゃんとこのチームはほんと面白いわねえ」

シユラフとメアリ騎士団長もゼクスに気付いたらしく、楽しそうに眺めている。

さすがドSコンビ・・・。

鈴を鳴らしたような可愛らしい笑い声を二人が上げる様は、バックに花を背負い込みそうなほど美しいが、悪魔の耳と尻尾を見逃してはいけない。

苦笑いを抑えつつ再びゼクスに注意を戻すと、ゼクスもこちらに気付いたようである。

ニパっ という効果音付きの笑顔で両手をぶんぶん振ってくる。

なんだか猛獣を飼い馴らしたような気分で思わず笑ってしまう。

それを見たゼクスはなにやら安心した表情でまた移動を再開し、混乱と悲鳴も同時再開した。

リンク・シユラフは、あと30分もあれば、半分くらいの騎士が地に膝着くことになりそうだなあと頭の中で軽く計算した。

「さあて、そろそろ夕食時だね。

子猫ちゃんとこの赤いやつも、もう満足したろうよ?」

メアリ騎士団長もゼクスの活躍に大満足だったらしく、ご機嫌な様子だ。

彼女が右手を挙げると、それが合図だったようで各騎士団長が集まってきた。

当然ながら、どす黒い不機嫌オーラを背負ったカムイも、である。

「姉上、いえ、騎士団長殿。いつまでうちの団員をお膝の上に置かれるつもりですか？」

今にも噛み付かんばかりのカムイの様子がさほど面白かったのだろうか。

メアリはからかうような口調で応酬する。

「ほう？二人は私の護衛なのだから、私の一番近くにいるべきと判断したが・・・」

なにか問題でもあるのか？カムイ第一騎士団長よ。」

「失礼ながら、二人が騎士団長殿を護衛しているというよりは騎士団長殿が二人を愛玩しているようにお見受けしますが」

昨晚の姉弟喧嘩に比べれば言葉は丁寧なもの、二人の間に流れる空気が陰悪なのは間違いない。

といっても、メアリは楽しみ、カムイは怒り心頭、そこだけは違いうたが・・・。

「では、カムイ第一騎士団長。そなたには子猫を一匹進呈いたそう。どちらがいい？」

完全におちよくっている。

「・・・姉上っ！！！！おふざけもいい加減になさってください！」

「ふざけてなぞおらんよ、私は」

「だったら何なんですか！下らない姉弟喧嘩に巻き込まれる二人の身にもなってください！」

メアリのふざけた提案に益々ヒートアップするカムイの怒りだが、それに比例してメアリのS心も刺激されるようである。

「今選ばぬというなら、二人には出張という形で王国騎士団に来てもらうしかないな。」

「なっ！！！」

頑として折れないメアリは新しい玩具を見つけた子どものように嬉々としている。

小さい頃はさんざカムイを苛めて遊んだものだが、お互い成長してそんなこともなくなり、カムイがいつちよまえに大人面をするようになったのがメアリには寂しくもあった。

戦い以外でこんなに高揚するのは久々だなとメアリはカムイを見つめながら意地悪な笑顔を浮かべる。

「さあ、選ばないのか？」

その場に居合わせた全員が緊張した瞬間だった。

みながみなカムイに注目していた。

先ほどまで巻き添えを食らわぬよう知らぬ顔をしていた他の騎士団長や王国騎士団員達も、カムイの答はまだかと生唾を飲み込んだ。

「……強いて選べと仰るなら……リ……」

「聞こえぬぞ？カムイ第一騎士団長。男らしくない。」

「……！リッリンクを選びます。というのもシユラフは今の状況を楽しんでいるようですし、リンクは見たところ……」

「ははっ！あはっひっははは！」

カムイが早口に続けた必死の言い訳（？）はメアリの爆笑で掻き消された。

膝上の二人を抱えこむ形で腹を押さえての大爆笑。

「・・・つよく言っただなカムイ！お前は真の漢だ！あはは！」

「姉上！！！！ですからこれは団長としての判断でありっ」

真っ赤になつて抗弁しようとするカムイだが、メアリに適うわけもない。

メアリはカムイと同じくらい真っ赤になったリンクをひよいと抱えるとカムイの前に差し出す。

「ほれ。頑張ったご褒美だ。シュラフも明日には返すから心配するな。」

ほぼ硬直状態かつ床に足がついていないリンクを受け取らないわけにもいかず、メアリの腕から奪い取るように受け取る。

一連の流れを見守っていた騎士団長達はなぜか安堵のため息をもらすと同時に拍手をした。

それにキツと睨みをきかしたカムイだったが、彼の必殺とも言われる鋭い眼光も顔を赤らめた状態では、からかわれた中学生の可愛らしい反抗にしか見えなかった。

恐るべし姉！とでもいうべきか。

（なんだかい物をみたなあと騎士団長達はこの時思っていたが、後にリンクが男であることを思い出し、ちょっとだけカムイの将来を心配したという話はこの合宿後のことなので、今は割愛しよう。）

「騎士団長殿。私はリンクと少し話したいので先に失礼してもいい

ですか？」

「ふふ。もちろんだともカムイ。

・・・だが、夕食後に団長会議を行う。それには必ず出席するよ
うに。」

最後の一言を発したとき、一瞬だけだが、メアリには珍しく苦虫を
噛み潰したかのような表情を見せた。

カムイもなにか感じ取ったようで、ふつと眉根を寄せる。

気丈な姉があんな表情をするのは珍しい。

だが、とりあえずはまさに針の筵といった感じのこの場から去るの
が先決である。

カムイは小さく頷きリンクを抱えて歩き出した。

どこに行こうかと迷ったものの、結局、裏庭の噴水に行くことにし
た。

まだ硬直気味のリンクだが少し落ち着いたらしく、先ほどから何度
も深呼吸を繰り返している。

壊れ物を扱うようにそつと地面に下ろしてやると、ぴくつと体が震
えた。

（我が姉ながら的を射てるな・・・本当にまるで子猫だ）

真つ赤になつて必死に深呼吸する姿は背毛を逆立てた猫のようで、
時折震える長い睫毛は艶っぽくも微笑ましくもあった。

「リンク・・・大丈夫か？」

「・・・ひあつ！・・・えと、だいじょ、ぶ、です！」

本当に大丈夫か？と問いたくなる返事だが、会話できるほどには回
復したようだ。

「さつきは・・・すまん。」

昔から姉上は俺をからかって遊ぶのが好きなんだよ」

いわゆる体育座りで体を丸めているリンクの顔を覗き込むようにして言葉をかける。

一瞬目が合ったが、ふいつと逸らされてしまった。怒っているのだろうか。

逸らされた視線を無理に合わせることもできず、立ち上がり噴水を見つめる。

「懐かしいな・・・。実はこの屋敷、うちの家の所有なんだ。」

小さい頃は避暑地として使っていて、父上に叱られたり姉上に苛められるといつもこの噴水脇で泣いてた」

ふいに口をついて出た言葉に我ながら驚く。

今はシュラフは楽しんでいたように思えたからリンクだと言ったんだと説明しなければならぬ時だというのに。

だが、意思に反して言葉は勝手に紡がれていく。

「この噴水から見る向こうの山にかかる夕日、すごく綺麗なんだ。」

・・・そっちに生えてる姫林檎の樹からもいだ実を食べながらよく夕日を見たな。」

くすつと小さな声がして、リンクの方を見ると、彼はこっちを見て微笑んでいた。

「カムイ団長にも、そんな頃があっただんですね・・・」

お姉さんに苛められてただなんて想像もつかないですよ？」

よかった。笑ってくれた。

彼の笑顔でこんなにも安心できるなんて不思議でならない。
少年の笑顔で安心するなんて自分はやっぱり頭でもおかしくなった
のだろうか。

「姉上は昔からあの鬼畜ぶりだったからなあ。」

「そんなまさかあ」

だが、コロコロと笑うリンクを見てみると、なんだかそんな不思議
すらどうでもよくなる。

「だけどな、昔……」

「えっ？」

小さな悪戯心がむくりと起き出し、リンクの耳元に口を寄せ、メア
リのちよつと恥ずかしい昔話を披露する。

暴露話をして姉にささやかな仕返ししてやれと思っていた。

だが、それ以上に、耳元に吐息がかかるたびピクリと反応するリン
クが可愛くて仕方がなかった。

内容なんて気もそぞろに、リンクの反応を楽しむ。

いつまでもこのささやかな暴露話が終わらなければいいと思った。

しかし、あくまで小話である。

永遠にも続くかと思われた甘いひと時は、リンクの笑い声と共に数
分で幕を閉じた。

リンクがひとしきり笑うのを見届け、本来の目的を思い出す。

「……リンク。さっきは驚かせてしまつて本当にすまなかった。

俺が冷静だったらもつとマシな応答ができたはずなんだが。

俺がリンクを選んだのは……」

先ほどと同じように言葉を続けようとしたが、唇の上にすつと添えられたリンクの人差し指によって、それは阻止された。

「カムイ団長。もう謝らないで下さいよ。

なんだかんだいって・・・僕、嬉しかったんです。

昨晩は第一騎士団に必要だと言ってもらえて、さっきは困ったところを助けてもらったんですから。

シユラフが楽しんでたのは僕にもわかってたくらいです」

最後の一言には悪戯っぽい笑顔が添えられていた。

この子には、本当に敵わないな・・・。

コロコロと変わる表情にいつも魅了され、いつも笑っていて欲しいと必死にさせられる。

「さて。事情はわかってもらえらみたいだし夕食食べに行くか？」

ふつと自分の感情の暴走に気付き、冷静になる。

自分には捜し求め恋焦がれる女性がいる。そして、なによりリンクは男だ。

きつと歳の離れた弟のようでほっとけないんだ。

自分に言い聞かせるように思考する。

「あ。ちよつとだけ待ってもらえますか？」

「ん？どうした？」

「あの・・・夕日を、見たいんです。」

ふわつと笑むその表情に釘付けになってしまう。

弟、弟と念仏か呪詛のように頭で繰り返しながら、リンクの隣に腰を下ろす。

「そうだな。」

それだけ呟いて、二人で静かに夕暮れを待った。

15分そこらの静寂は穏やかに優しく、複雑にこじれた赤い糸に繋がれた二人を包み込んだ。

2・8「二泊三日のマソ合宿3」（後書き）

若干スランプ気味で文章がうまくまとまりませんorz

いつもより更に読みにくかった文章、最後まで読んでいただきありがとうございます

次章ではチヨイ出だったキャラや懐かしのサライが登場予定です。
よければ今後も読んでやってくださいね。

評価の方も、ばっさりばっさりやっていただけるとすごく嬉しいです。

3 - 1 「変わりゆく日常」

第三章 1 話「変わりゆく日常」

「暇だ！暇すぎる！」

二泊三日の合宿も終わり、リンク達はまた通常任務に戻った。合宿参加者の大半は二泊三日が限界だと喜びいさんで帰還したが、ゼクスだけは別だったようである。

戻ってからというもの、どこか呆けた顔で調子がでないようだった。

「面白くない。」

「・・・うまい茶だ。」

シュラフはシュラフでメアリとの絡みがなくなって退屈がっている。唯一なにも合宿中と変わっていないのはカイくらいだろうか。

「平和だ・・・」

リンク本人はといえば、平和な日常のありがたみをひしひし感じていた。

暇を見つけるとお茶を淹れて日向ぼっこ・・・と、隠居のような生活をしている。

しかし、リンクには気になって仕方がないことがあった。カムイが帰ってこないのだ。

「・・・団長は、どうしたのかなあ？」

「ああ。そっぴや他んとこの騎士団長も屋敷に残ってたぜ。奴らだけで打ち上げ宴会でもやってんじゃねえ？」

「メアリ姉さんに遊ばれてんじゃないの？」

「・・・わからない。」

リンクがふとこぼした疑問にそれぞれ勝手に答えを出す。

しかし、それぞれ確かに同じ疑問を持つてはいた。

合宿が終わって一週間、カムイはまだ帰ってこないのだ。

団長の留守を預かっているライスさんに聞いても「団長には団長のお仕事がありますからねえ」と曖昧にはぐらかされ、彼の笑顔はそれ以上の追及を許さなかった。

今までも団長が留守にすることはあつたが、一週間は長い。それに、たまにやってくる伝令の早馬も不安を掻き立てた。

「皆さん、こんなところにいたんですか？」

庭でのお茶会にふいの乱入者。

それはライスさんだった。

「今から来週入った特殊任務の説明を行いますから。食堂に来て下さいね。」

につこりと4人の移動を促すと、他の団員を探しに行ってしまった。

「よっしゃ！仕事だ！」

「どーせ馬鹿貴族の護衛とかでしょ？」

「・・・。」

「どっこいしょっと。」

ライスさんが切れると怖いらしいという話は4人もよく聞いていた。彼より先に食堂に入っておこうと各々らしい言葉を発して重い腰をあげた。

「みなさん揃ったようですので、説明を始めましょうか。」

ライスさんはパンパンと手を叩くと、みなに清聴を促す。

「来週末、王立魔術学院の入学式が行われます。各地から要人が集まりますので、皆さんに護衛を頼みたいという依頼がきました。まあ、毎年恒例のことですし、わからないことがある人はチームリーダーに聞くといいでしょう。」

華麗な丸投げとでも言おうか。

後でチームごとのシフト表を配りますと言ったライスさんは既に壇上から降り、あっけにとられているリンクの目の前にきた。

「お義父さまからリンク君に是非会いたいと伝言を承りましたよ」

と、悪戯っぽい笑みを添えて耳打ちするライスさん。

「サツ・・・お義父さんが?!王都に来るなんて一言も言っていなかったのに」

大小問わず王都への招待はことごとく断って隠居を決め込んでいたサライが快諾したというのも驚きだが、リンクが護衛する場に来るなんて・・・

義父の「えへへ来ちゃいました」なんて言う様子が頭に自然と浮かぶ。

サライに手紙を書かなければとリンクは自室に直行したのであった。

その日の夜、サライからすぐに来た返事を読みながら、リンクは自室でうなだれていた。

「リンちゃんへ

最近めつきり手紙をくれなくなっていたから心配していましたよ。来週末の入学式の件ですが、私からライスさんの方に話をつけますので、護衛の任から離れるようにしてください。

王立魔術学院の関係者レベルの力があると、リンちゃんの変装がバレてしまう危険性があります。

忘れてはいないと思いますが、一定レベル以上の魔力保有者の目にはリンちゃんは元の姿つまり女の子に映ってしまいますので。

護衛の任の間は特別休暇をとって私の宿舎に来て欲しいな。

久々の親子水入らずを楽しみましょう。

サライはより」

王立魔術学院での護衛任務は特殊業務扱いなので、ボーナスが出るはずだったのだ。

ボーナスが出たら特別休暇でもとって小旅行にでも行こうかとシュラフ達と話していたところに、この手紙。

ボーナスも特別休暇も一気に消えてしまった。

（そういえば、僕・・・いや、私って女の子だったんだ）

当たり前の事実をすっかり忘れていたことに気付く。

ふっと顔を上げると鏡に映った自分自身と目が合う。

短く切った髪、ぺったんこの胸（もともとそんなになかったけど！）

、昔よりちよつとだけ広い肩幅・・・

見慣れた自分の姿をまじまじと観察する。

いつの間にかすっかり慣れ親しんでしまった男の子の自分。

今スカートなんて履いたらちょっと気持ち悪いなと苦笑いしてしまう。

ふつと昔お気に入りだった白のワンピースを着た自分を思い出す。想像はふくらみ、場所はお気に入りだったあの動物園で、隣にはカムイ団長……。

(……!!何考えてるの私は?!)

勝手に膨らんだ想像に一人赤面してしまう。

(恋、してるのかなぁ……私)

もつと違う出会い方をしていたら、どうなっていたんだろう。

今頃、デートとかしてたのかな？

いつもは警備で歩き回るアルフィンの道々を二人で歩く姿を想像する。

美形の団長の恋人なんて注目的だろうなとにやついてしまう。

(けど、無理だよねぇ)

これまでに、人気の高いカムイ団長の噂は嫌でも耳に入ってきた。

「貴公子のクレイとやんちゃのカムイ」

第一騎士団長のカムイと第二騎士団長のクレイは二人揃って美形で二人は競うように令嬢のハートを射止めてきた、と。

ここ最近カムイ団長は色めいた噂が消え、どうやら秘密の恋人ができたらしい、とも。

百戦錬磨のカムイ団長が夢中になる女性。

きつとどこぞの深窓の令嬢だともっぱら町の噂だった。

本当は女だといっても今は男の姿をして彼の部下となっている自分が敵うわけもない。

それに・・・とリンクはため息をついて一人ごちる。

（元カレからもお前は女らしくないって振られたんだっけ）

もし女の姿で出会っていたとしても、噂の女性に勝てるわけがなかっただろう。

可愛いものの好きの彼のことだ。好きな女性のタイプも可愛くて細やかな女性らしい人に違いない。

合宿の最終日に二人で見た夕日。

もしかしたらと期待した自分がちよっとだけ情けなくなる。

（しばらく恋はお休み！仕事頑張るぞ！）

ぱんつと頬を自らはたいて気合を入れる。

叶わない恋を追うくらいなら、仕事に精を出そう。

悲しい恋なんてごめんこうむるんだ。

本気で惚れる前に気付けてよかったなんて独り言をこぼすリンク。

カムイの秘密の恋人が自分だということを彼女が知るのとはそう先のことではない・・・。

3・1「変わりゆく日常」(後書き)

評価感想お待ちしています！

3・2「迫り来る影」(前書き)

今回はちょっと短めです。

よければ感想・評価お願いします！

3 - 2 「迫り来る影」

第三章第二話「迫り来る影」

クレイとカムイは延々と走っていた。

背後から次々と迫る追っ手からの攻撃を回避しつつ、だ。

「ちいッ・・・こいつらどこまで付いてきやがる！」

「クレイ！炎を遣うから下がれ！」

「ちょ！おま！それは！」

クレイの焦った声を聞き流し、カムイは詠唱を始め腕の辺りををまさぐる。

「心配するな。そこらに隠れとけよ。」

クレイが木陰に入ったことを横目で確認し、腕輪を外すカムイ。すると、みるみるうちにカムイの周辺の空間が歪曲し、彼自身も苦悶の表情を浮かべ始めた。

「・・・ッ！ぐああああ」

めりめりという嫌な音と共に、カムイの背中からなにかが生える。同時に彼の姿自体も変形し、あっという間に白い羽根を生やした黒い巨狼が現れた。

「・・・おいおい。やべえじゃねえか・・・。」

彼の幼馴染であるクレイはこれまでも何度か彼の変身後の姿を見

てきた。

しかし、これまでに”完成体”に近づいた目の前の姿に驚愕の色を隠せない。

（もうタイムリミットが近いってことかよ・・・）

クレイの驚きをよそに、目の前の異形は火炎を吐き、追っ手達を次々と焼き払っていく。

惨状を目の当たりにし逃げ惑う追っ手すら彼は悠々と羽ばたき、火の玉にしていった。

ものの数分で片はつき、燃え盛る木々の中心で異形は朗々と雄たけびを上げる。

再び空間が歪み、異形の体から黒い煙が立ち上った。

「大丈夫か?!」

「・・・なんとかな」

声をかけると、立ち上る黒煙の中からカムイが出てきた。

こめかみを押さえ、苦しげな表情を浮かべている。

「クレイ・・・。」

何か気になることがあったのだろう、厳しい表情を浮かべてカムイが話を切り出そうとする。

「・・・カムイ。とりあえず新しい服着ろ。話は後だ。俺は男の裸にや興味ないんだ。」

「すまん。」

と、真面目くさった顔のカムイのお腹が突然ぐうぐうとすさまじい音

を立て、それを見たクレイは爆笑。
とりあえず火を起こして飯でも食うかと二人は歩き出した。

「やつとアルフィンか・・・」

ギアルとアルフィンの間には2つの森林が横たわる。

アルフィン側に位置するのが夕紅の森。サライが住む森である。

一方、ギアル側に位置するのが惑雪の森と呼ばれる森だ。

クレイとカムイは現在、ちょうど夕紅の森の北端にいる。

追っ手達は惑雪の森から延々と彼等を追い続け、夕紅の森の入り口まで着いてきたのだ。

合宿後の団長会議では、ギアルの不穏な動きが議題となった。

カムイとクレイには”四天子の復活という噂の真偽を確かめろ”という命令が下され、ラインシュタット城からそのままギアルへと隠密の旅に出た。

パチパチと心地よい音を立てて燃える焚き火を見つめるカムイ。
ぼんやりとしたその瞳には、いつもの活気は見られない。

「カムイ。その・・・なんだ・・・」

意を決したようにクレイが口火を切るが、言葉が見つからないよう
でどもってしまふ。

「・・・俺、そんなに獣化進んでたか？」

質問というより、自嘲するかのような口調でカムイが引き継ぐ。

「・・・かなり、な。」

「自分でもわかってるんだ。最近、妙に体が軽いし夜目も利く様になった。」

浮かない表情のクレイを慰めるかのように急に明るい口調になったカムイだが、幼馴染の目は誤魔化せない。

困ったもんだよと軽い口調でおどけてみせるカムイは、クレイの目からすれば心配の的以外の何者でもなかった。

「あの子はまだ見つからないのか？」

「見つからない。でも、あの子が俺の”鍵”だとはまだわからないしな。ところで、お前の最近のお気に入りには城下町の踊り子ってマジかよ？」

カムイはこの話を続けたくないらしい。

「そんなこと今はどうでもいいだろ！俺はお前が心配なんだ！」

思わずクレイの口調も荒くなってしまう。

「今は俺自身やあの子のことよりギアルの問題が最優先だ。心配するなよ。今日明日に何か起こるってわけじゃないんだから、な？」

そんなクレイをやんわり諫めるかのようにウインクまでつけるカムイ。

とことん強情な友人にクレイも折れるしかないと悟ったようだ。

「ったく・・・とりあえず今日は寝るか。明日の夜までに報告を済ませなきゃだしな」

「おーけい相棒。俺が先に見張りに着くから、お前は寝てくれ。」
「あいよ。じゃあ3時間経ったら起こしてくれな。」

絶対に眠れないだろうなと思いつつも、幼馴染の隠された強情さはよくよくわかつているつもりだ。

とりあえず言葉に従い、クレイは目を閉じる。

目を閉じる直前に瞳に映ったのは、幼馴染のうつろげな表情。

ギアルの動きも気になるが、クレイにとって一番の懸念はやはり力ムイ。

王都に戻ったら例のあの子の事を本格的に調べようと決意をしつつ、狸寝入りを決め込むクレイなのだった。

3 - 3 「乙女心と男心」

第三章第三話「乙女心と男心」

「サライ！久しぶり！」

「リン！会いたかったですよー！」

ぎゅうつと効果音がつきそうな抱擁。

ここはアルフィンの城下町の宿場、サライがこれから3日間滞在する予定の部屋である。

サライほどの要人となれば普通もつと高級な宿場を利用するものだが、彼自身の希望とあって部屋は質素なものだった。

リンが気兼ねなく遊びにこれるようという配慮もあるが、彼自身が華美なものを嫌う性質であるためだ。

しかし、部屋は綺麗に掃除され窓際にはサライが好む百合のような花が活けてある。

宿場の女将なりの歓迎の意とれよう。

「今日は一日お互いにお休みですし、お茶を飲んだら外に行きませんか？」

「もちろん！サライよりも街には詳しくなった自信あるんだからー」

「じゃあ案内をお願いしますね」

きやつきやと騒ぐリンを見てサライの頬が緩んでいく。

わざわざ隠居を出てきた甲斐があるものだとお茶を注ぎながら考える。

「さて、その前にちょっと失礼。」

サライはふふつと笑って小声で詠唱を始める。
きょんとしたリンは何事かと不安げだ。

「ほら。終わりましたよ」

何が起こったのかわからないリンは更に訝しげな表情である。
どういうこと？といった顔できよろきよろする彼女に、ついついと体を指差してみる。

「うそーーーーー?!」

つられるように自分の体を見たリンの絶叫。
この絶叫も久々に聞くなあと微笑んでみると、詰め寄ってきたリンに肩を掴まれガクガク揺さぶられる。

「女の子に戻ってるじゃん!だめじゃん!街なんか歩けないよ!」

ほんの悪戯心からの行為だったのだが、リンにとってはかなりの打撃だったようである。

顔面蒼白でなんだかんだと喚いている。

「大丈夫ですよ。女の子の服を着ていれば”リンク”とはわからないですし。もし知り合いと会ってバレてしまったら双子の妹ってことにしちゃいましょう?」

しかし、これくらいで引けるわけがない。
せっかくリンに会うために王都までやってきたのだ。
男の子バージョンも悪くはないが、せっかくならリンクではなくリンの姿で一緒に過ごしたいものである。

「・・・うん・・・。でも・・・」

「リン！お願いします！」

「あゝ・・・もう仕方がないなあ」

「ありがとうございます。そうとなったら・・・」

この時のためにと買っておいた女物の服を取り出す。

薄い素材の白いワンピース、柔らかな革素材の茶のブーツは房飾りが付いている。

直接出せばセクハラだろうと踏んで包み紙に入っている下着も、こっそり自分好みの白のセットにしておいた。（レースたつぷり！）小物として上品なラメ入りのピンクのショールもつけてみたり。

買い物あまり好きではないサライだが、これらの品を買うときだけはうきうきしてしまった。

「可愛い！ありがとうございます！なんかオシャレするのって久々だから嬉しいかも」

気に入ってもらえるかとちょっと不安でドキドキしながら見守っていたサライだが、リンの本当に嬉しそうな表情にほっと安堵する。

「では、しばらく外で待っていますので、着替えてみてくださいね」「はい。すぐ終わるから待っててね！」

早速着替え出していたリンが衝立の向こうからひらひらと手を振る。これも半年近く男の子として生活したがゆえの習性なのだろう。

警戒心もへつたくれもないリンの行動に少し顔を曇らせるサライ。しかし、彼女の突き抜けた明るさに警戒というのはあまり似合わない。

惚れた弱みというのはこういうものなのかもしれないと苦笑いしながら、サライは部屋を出た。

宿を出て30分後、城下町の中心を抜け10分ほど歩いたところにある湖に二人はいた。

気を利かせた宿の女将が準備してくれた特製のお弁当を持参しての軽いピクニックである。

お互いの近況や二人で暮らしていた頃の懐かしい思い出話に華が咲く。

夕紅の森とは生茂る木々や囀る鳥の種類は違ったが、二人の縁は変わらず続いていると確信できる穏やかな時間だった。

「ねえ。サライは恋をしたことある？」

「・・・これはまた唐突に面白い質問をしますねえ。」

くすくすと笑うサライに顔を赤らめるリン。

「真面目な質問なんだから、はぐらかさないでちゃんと答えてよー！」

むうつと唇を尖らして抗議するリンを可愛いと思いつつも、質問の背後にあるであろうリンの恋心に思いを募らせるサライ。

（ああ、この子はこんなにも簡単に私を喜ばせては不安にさせて・・・。

子どもの悪戯にも似て、悪意なきその行為は、純粹であるからこそ私を傷つける。）

「そうですね。もう長く生きていますので、恋のひとつやふたつありましたよ。懐かしいものですね・・・。」

「そうだよ。サライって顔良し！性格良し！頭脳よし！・・・っ
ていうより、ダメなところが思いつかないもん。女の子がほっとく
わけ無いよね。」

にやにや笑いでサライの顔を覗き込むリン。

「今日のリンは口がうまいですねえ。そんなに褒めたって何も出て
こないですよ。」

我ながらもつとうまく返答できないものかと情けなるものだが、リ
ンが相手となるとサライは無力である。

ここでもつとなにか伝えられたらいいのと思う反面、今の関係を
失うことリスクだけは絶対に冒せないとも思ってしまう。

「そんなつもりじゃないもん。でも、ほんとに思うよ。サライみ
たいな人に愛されたらきつと幸せだろうなって。」

からかつてるんじゃないもん」と呟きにつこりと笑うリンの様子が恨
めしいくらいだ。

照れ隠しなのかそろそろ行こうかと立ち上がり、小声で歌を口ずさ
む彼女の声。

それは一種の警告音のようにサライの心中を揺さぶる。

さざ波のように揺れ惑う心を必死に静めようとしたが、今の彼は無
力。

そして一瞬の間を置いて彼の口から出た言葉は、彼自身にも予想が
つかないものだった。

「愛してますよ、リン。あなたのことを心から。」

まるで心と体が分離したかのような感覚だった。

そんなこと言っではいけないと叫ぶ心とは裏腹に、体は、唇は動いていた。

「え？」

振り向いたリン。

それを見つめるサライ。

鳥のさえずりが遠くなってゆく。

この時だけは風音すら声を潜めたかのようにだった。

「・・・あなたは大事な、娘、ですから」

搾り出すように一句一句をつなぐ。

唇はそれを拒否するように乾き、うまく喋れなかった。

しかし、それ以上に離れていくリンを見るのは怖かった。

「ありがとう。私もサライを愛してるよ。」

その笑顔があまりにも晴れやかで美しく、サライの心には鋭い棘のように感じられた。

自分でも悲しい位にわかっていた。

まだリンにとって自分は「養父」であり「師」であり「友」に過ぎないのだと。

その称号はとても誇らしくもあつたが、「男」としてはスタートラインにも立てない自分が齒がゆかった。

しかし、信頼する自分がその立場に不満を抱いていると知ったらリンはどう思うだろう？

彼女は泣くんじゃないだろうか。

リンの泣き顔なんて見たくなかった。

そう、彼女の笑顔を始めて見た時、自分がどう決心したか今もしっかりと覚えてる。

何を賭けてでも彼女の笑顔を守ろう。

それがたとえ自分の想いであっても、彼女の笑顔を守ろう。

未来のことなど誰にもわからないけれど、いつかこの想いを伝えることができたらと思う。

しかし、それは今ではない。

彼女の笑顔を失う可能性がある今は、この想いは胸に仕舞ってしっかりと鍵を閉めなければ。

「では、参りましょうか？お嬢さん。」

「ええ、しっかりエスコートしてくださいね？お父様。」

差し出した手の上を握り返す暖かく小さなその手。

今はそれを信じ愛し守ろう。

サライの新たな決意に祝福を送るよう小鳥達は囁りを木々は風音を奏でていた。

3・4「世の中は狭いものがあります」(前書き)

久々の更新です。

亀更新で本当に申し訳ないです・・・。

他サイトの更新にかまけてこっちサボってました。

反省orz

なんとか完結に向けて頑張りますので今後もよろしくお願いします
!

3 - 4 「世の中は狭いものです」

第3章4話「世の中は狭いものです」

「気にしないでいいよ、サライ！」

「本当にすいません……。というより、私自身が残念でならないです。」

「まだ時間も早いから、用事が終わったらお茶でもしよう？ ね？」

湖畔での食事を終え、今から街の散策でもしようと二人が歩き出していた矢先のこと、一羽の美しい小鳥がサライの肩に止まった。小鳥が小さく囀りながら指し示したその脚には小さなメモがくくりつけられていた。

こんな時に誰でしょうかと、訝しがりながらもメモを開くと

” サライ殿。至急、王立魔術学院までいらっしやるよう。リロイ”

額に手を当ててがつくりとうなだれるサライ。

どうしたの？ と首をかしげてこちらを伺い見るリンとメモを交互に見て思わずため息。

「申し訳ないのですが、王立魔術学院の現院長から呼び出しをくらってしまいました。大した用事ではないと思いますが……」

結局、そのままサライは王立魔術学院に行って用事を済ませ、それからリンと街で合流しようという方針で固まった。

別れ際のサライの落ち込みようといったらかなかのものでトボトボと去る姿にリンは犬か何かを捨てたような罪悪感に駆られたほどだった。

しかし、久々の女の子姿！

最初は不安だったものの、すれ違う街の人々は誰も気付かなかった。

・・・そう！これはまさに格好の買い物日和！！！！

日頃、リンクの姿では入りづらい女性服のお店や宝飾店にだって入り放題！試着し放題！

サライには申し訳なかったが、買い物は一人派のリンにとって、サライの呼び出しはちよつとしたチャンスだった。

学院への道を曲がるサライを見送って意気揚々と街へ繰り出す。

思えば女の子の服を着て出歩くのは3ヶ月ぶり。更に言えば、街を歩くのは初めてのことだった。

不思議なことに、見慣れた街の風景がいつもと違って見える。

騎士団員のリンクの目と女の子のリンの目、それは同じであって違うものなんだなあとふいに感じる。

女の子のリンは一時的にいないんだ。

そう思うとなんだか寂しかった。

リンクを知っている人たち・・・

顔見知りの街の人、騎士団の仲間達は女の子のリンを知らない。

そして、カムイ団長も女の子のリンを知らない。

彼が知り、彼が可愛がっているのは男の子のリンク。

そこまで考えて、あつと息を呑む。

考えちゃいけない。気付いちゃいけない。

気付いてしまいそんな感情に蓋を閉める。

（知らない世界で叶わない恋をするなんて絶対に嫌だもん・・・）

小さく決意してまた歩き出すリンだった。

「ふう。よく動き回った……」

満足気に呟いて暖かいティーカップを握りなおす。

向かいの椅子には袋や箱が鎮座している。

買い物を通り終えたリンは、とある喫茶店にいた。

運よくテラス席に通してもらい、ぽかぽかと心地よい日光の下、最高に美味しいお茶とケーキで至福の一時……

（ここのケーキ美味しいって噂、ホントだったんだあ。いつもならゼクス達と一緒にだから昼でもバーにいるしね。あゝ幸せ）

料理上手のカイがたまに甘味も作ってくれるが、やはりプロの技は一味違う。

久々に食べるケーキのスポンジの感触に酔いしれる。

（ふわふわあああ~~~~~）

混み合う店内を見渡せば女性客ばかり。

リンクの姿で訪れていたらきつと浮いていただろう。

女の子って幸せ、と一人でにやつく。

「お客様……大変申し訳ないのですが、店内が混み合っていますので相席をお願いしますか？」

ふいに女性店員から声をかけられる。

自分の卓を見れば、椅子があとひとつ残っていた。

「あ、もちろん。大丈夫ですよ。」

男ばかりの騎士団員の耳にも入ってくる人気店である。

そりゃあ相席だつて仕方あるまい。

若い女の子だつたら久々にガールズトークなんて出来ちゃうかも？
！とわくわくしてしまう。

が、しかし・・・

「申し訳ないです、レディー。お隣に失礼しますよ」

ふいに上から掛けられた声は男性のもの。

しかも、聞き覚えがあるこの声は・・・

「だっ・・・あうっ・・・ど、どうぞ。」

うふふと俯き加減でごまかしを試みる。

相手さんはそれを男性に慣れていない年若いレディーの照れ隠しと受け取ったのか・・・？

「そんなに緊張なさらないください？怪しい者ではありません。

騎士団に勤務しているカムイ〓リオリスタ〓ブラッドフォードと申します。以後、お見知りおきを」

柔らかい物腰でそつと跪き、いかにも上流階級らしく述べる彼。

（だ、だんちよー！ー！ー！ー！ー！マズイ！ー！ー！ー！ー！てかなんで
一人でケーキ屋？！）

完全に頭の中が沸騰状態のリンの脳内など知る由もないカムイ。ふっと笑った気配がしたかと思えば、これまた流れるような動きでリンの手をとり、その甲に軽く口付ける。

その瞬間、完全に硬直したリン。沸騰どころか思考は完全停止。そんなリンを見たカムイはちょっとやりすぎたと思ったのか？

「レディーのお気に障るようでしたら私はここで退散しますが・・・」

「あつ・・・！あのっ私は気にしてないのてっ」

（・・・・！！！！私、何言ってるの！！！！）

条件反射というのは恐ろしいものだ。

元来、お人好しなリンの選択肢にここで黙って見送るなんて賢いものは無かった。

「ありがとう。あなたが心の広い女性で助かりました。」

それを聞いて安心したのか、満面の笑みで椅子に座るカムイ。彼を追い払うチャンスを自ら逃したことにうな垂れるリン。

（ああ、神様・・・世間は狭いものですね・・・）

リンの心中も知らず、カムイは楽しげにメニューを覗いていたのだった。

「このケーキは本当に美味しいですね。私はよく通っているの

リンにとっては最悪の事態。

そんな思惑のズレた二人の行動は双方とても分り易いもので・・・

椅子を飛ばしそうな勢いで逃げ出すリン。

それを追って腕を掴もうとするカムイ。

（なんで逃げるんだ?!?!）

（絶対バレてるーーーー!!）

この期に及んでもズレまくる二人。これも一種の男女のすれ違いとやらなのだろうか？

しかし、運命の女神はカムイ側に微笑んだようで・・・

「レディー。ちょっと待ってください！」

何事かと駆けつけた店員に行く手を遮られたリンをカムイが捕獲。

右手でリンを捕まえたまま手早く会計を済ませリンの方に向かい合う。

「ちょっとお話ししよう。」

有無を言わせぬその真摯な眼差しに、とりあえず頷くしかないリンなのだった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0314d/>

Travel For You

2010年10月10日19時39分発行